女流文藝雜誌

ビアトリス



四月號

Digitized by Google

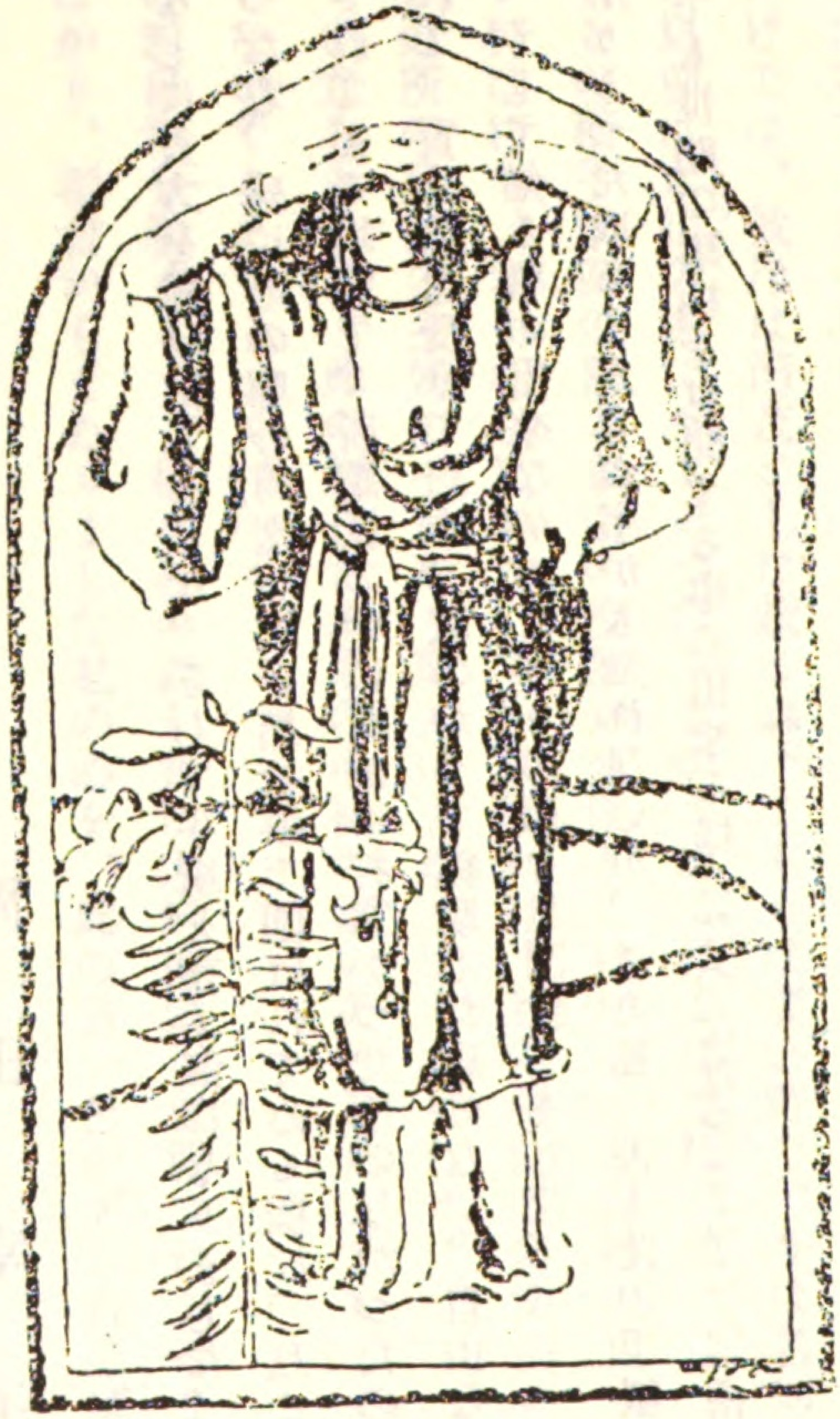
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ビアトリス
四月號

目次

ビアトリス

第二巻 第三號



夏草の繁みより

岡田幸子

Kさん、私は今何とはなしに貴方を思ひ出しました。そして手紙を書く氣になりました。

都會に生れて都會に育つた私、殊にあの邸の周圍が高い黒板塀で圍はれてゐる樣に、私と云ふものにも束縛と云ふ目隱しをされてゐる境遇で、所謂世の中に直かに打突かつた事のなかつたのが、ふとした機會から親の家を離れて、實に生を受けて以來、私のかつて經驗した事のない、自由な生活を送る樣になり、今迄に知るべくして知る事の出來なかつた種々の事を見聞致しました。

それは貴方にとつては解りきつた取るに足らぬ事かも知れないが、まあ私の書く此の手紙を御讀み下さいまして、兎に角一つでも世間の事柄を見聞する事の出來る樣になつた私をよろこんで頂きたい。

此の話の前提として、どうしても家を取卷く自然を詳細にお知らせしておく必要がある。

もと此の家は水車屋の母家なのである。谷山の水車と云へば、昔からかなり有名なものであつた。

それが親子して相場に手を出し、失敗は失敗を生んで、父親は四萬圓の負債を氣に病んで、それが爲に沒し、息子は自暴酒をあほり、あげくに藝者に陷つて出奔してしまつた。その結果、借金のかたに

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家はとられ、遂に水車小屋も立ち崩れのやむなきに至つてしまつたのだ相です。それを借りうけたのが、私の兄なので御座居ます。

家は草葺屋根の頑丈な、まるで荒いごばう縞の着物に、大森鬘。何んて事はない、長脇差の棲み相な建方なのです。北うけは出窓で、其の前に目黒川が俗稱龜の子島を抱いて流れてゐる。其の流の兩岸は私の目にうつる限界だけでは、彼岸は鬱茂とした藪と森。こちらは廣い野で、今は名知らぬ夏草が繁つて居る。その野中に以前は米搗(こめつき)の家でゞもあつたらうかと思はれる草屋根が傾いて、白壁の落ちはてた二軒の家がある。その横手は例の前の家主の沒落以來眠りこけた樣に、運轉の止つてゐる水車小屋なので御座います。軒は朽ち、羽目板は破れた、その周圍には、私の胸位迄の丈高い草が生えて居たのです。二三日前に近所の農家の主婦が一日刈り取りにまゐりましたけれど。

夕日影薄れ行く頃、ぢつと立ちまして、此の廢れた水車の心棒の濃い茶色を見ますと、そゞろ榮えた日の思はれて厭な氣がしないでもありません。

南の方、座敷の前は庭の四目垣を境として、桐ケ谷の森を背に大崎田圃が展開されてゐます。目に見ゆる總ての色が只、青ばかり、都會からまゐりました私の心を、此の青い色がどれ程喜ばした事でせう。

今、此の四目垣の直ぐ下を運河と云つては大袈裟でせうが、兎に角河を掘割(ほりわり)して居ます。龜の子島を抱いて屈曲してゐる流れを、一直線に黒繻子の帶を垂らした樣にするとか聞きました。その河掘工事には澤山の勞働者が働いてゐる。夜のひき明け、四時位から始つて、午後三時頃に終るのが毎日の例です。私は今迄に一度も話した事もないかうした階級の人達に向つて、新らしく目を開けて、興味

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を持つて近づき始めました。兄は毎朝八時に會社へ出て行きます。其の後でひとりになると、私は白い日傘を肩にして庭の端から彼等の仕事を見下します。

夏の日は焦げつく樣に筋骨逞しい赤銅色の勞働者の體を射てゐます。泥に染つた猿股、無造作に冠つた笠。かうした一樣の風體(なり)をして、凡そ二三十人も一列になり、まるで私達がペンを扱ふ樣に、かるぐ〜と鍬を取扱ふのである。彼等の節面白い歌につれて、艶やかな泥土は羊羹を切るかの樣に形正しくそがれて行く。其の有樣は、只それだけで詩であり、繪で御座ゐます。あの私達が好んで見るゴツホの描くのは、此の樣な所だとひとりうなづいたのです。

此の家の裏には、ラヂユームの噴き出す井戸があります。其の水の冷たさは、とてもお話しにならない程で御座ゐます。仕事に疲れた勞働者は皆申し合せた樣に、此の水を飲みに來る。しかも腰ひくゝ下女に、

「どうぞお水(ひや)を一杯下さいまし。」

とことはるのです。

井戸の水は自然に噴き出すのであつて、所有權は私達にはない。斷らないで飲んだからとて、何も云へるわけのものでもないのに、彼等は斷つて飲む。私はその態度を非常に美しいものに思ひました。懷中に澤山の金を持ち贅をつくした衣服を纏ひ、何の某と人に目をつけらるゝ所謂紳士にして、この土方(どかた)程の美しい態度を持つた者がありませうか。ねえ、Ｋさん、私はないと云ふより致し方がない。

話が橫道にそれました。もとへかへりませう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それからと云ふもの私は、此の人達に非常な好意を持ち、母から送られた果物を與へたり、コップなどを貸與しました。彼等はその都度どれ程丁寧に謝して行くか、とても貴方にはお解りにならぬ位です。

それは私がこちらへまゐりましてから、五日程たつた夜の事であつた。湯から上つた兄妹が椽先に涼みながら、何とはなしに談してゐて、これから床に入らうとして居た時でした。見慣れぬ男が提燈を下げて、裸足の足音もなしに、ふらりと庭さきに入つて來た。二人は申し合せた樣に、ギヨツとして、心を緊めました。然し直ぐに私達は彼が前の河で働いてゐる勞働者の一人である事を知りました。彼は私を

「奥さん。」

と呼びかけました。

「あのまことに濟みませんが、お香の物を、少し呉れませんか。」

彼は髭の多い赤ら顔に、にこやかな笑みを浮べて頼むのである。私は香の物と云はれた時に、アイスボツクスに入れてをいた晩食の殘り物のお菜に氣がつきました。彼の出した、所々禿げかゝつた辨當箱の蓋にそれらの物を移し入れて、その他に菓子とお茶の土瓶を與へました。

「飲んでしまつたら、空の土瓶は戸の外に置いて下さいね。」

「へえ、まことに有難う御座ゐました。こんなに澤山に。」

「大變ですね。いつも晝ばかりだと思つてゐましたのに今夜は未だ働いてゐるのですか。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「へえ、掘つてしまつた所へ水が入つて來るのを、三人で夜張りして、かひ出してゐるので御座ゐます。」

「まあ三人で。それは御苦勞ですね。」

私と彼との間には、こんな話が取交された。そして又、彼の提燈は四目垣の向ふへと出て、河の岸に消えた。

其の日の午下り、二三人の土方が庭の前で晝休みをしてゐた所へ、私が行き合せますとその中の一人が、

「よく照ります。お暑う御座ゐます。」

と會釋しました。

「ほんたうに、此の暑さではたまらないでせうね。水でも、何なりと遠慮なく取りに來て下さい。」

と私は云つた。よく顔は覺えませんでしたけれど、私の言葉に從つて、彼が取りに來たものと見えます。私はうれしかつたのです。勿論事柄は些細であるかも知れぬ。然し、多少なりとも、私と云ふものが、他人に與へた快さを思ふとたまらなくうれしいのでした。そして私は兄に、その晝の事を話しました。

「さう、お妙さんが、インチメートしたの。」

兄は今更らしく申しました。私のその夜の眠りは安らかで御座ゐました。

戸の隙間から朝の白い色が忍び込んで、私の目を醒した時、私は床を出て椽の戸を繰り開けた。そして直ぐに私は昨夜の土方との約束を思ひ浮べました。然し戸の外に置いてあるべき空の土瓶はない

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のですもの。私は輕く心に失望を感じました。

私が幼い時に、用達に行かうとする祖父を後から呼びかけて、

「御祖父樣、孃やによいお土産を買つて來てね。」

と云つた。祖父の顔は、にこやかに點頭いて門を出て行つた。私の幼い心はどれ程美しい想像にかられながら、彼の歸りを待つた事でせう。しかも歸つて來た祖父の手には、私の期待した友禪染の長襦袢の樣な、紅澤山な千代紙もなければ、おどけ者の人形さんもなかつた時、私の心は直ぐ忘れらるゝ、輕い失望に追ひ込まれた。此の朝私の感じた心持ちと、その幼い日の心と丁度同じ事でした。

私達兄妹が朝の食卓に箸を取つた時、此の話が出ました。

「ねえお兄さん、こつちで少しの隔てもなく、同じ人間として彼等を取扱はうとしても駄目ですね。」

「さうね。然し、今迄下層社會の人々は一個の人間として、尊重されない事に慣らされてゐるから、僕達の心持ちも、あの人達には解らないんだ。」

「さうかも知れない。それにしても、貴い自分の心やりを蹴轉がされた樣な氣がしますよ。」

二人はそれなり、此の事に就いて忘れた樣に話さなかつた。兄は其の日も、そゝくさと仕度をして靄が晴れて、少しも風のない、まるで菓子の蒸籠に入れられた樣な、蒸暑さの中を都會へと働きに出て行きました。後に取殘された私は、又白い傘を肩にして河の縁に立ちました。異常な暑さに掘り返された泥土は、煮えてゐる樣に思はれる。その中に兩足を踏み込んだ、同じ樣な規則正しい勞働者の働きぶりはいつもと變りなかつた。物質文明の影だもない、原始的な此の有樣。ぢつと眺める私の頭に、その昔バベルの塔はかうした人の手によつて築き上げられたのだらうと云ふ考へが起りました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「奥さん、お早う御座ゐます。」

と足下から呼びかけられた聲に、私のバベルの塔の夢は破られました。其の聲の主は昨夜の土方である。

「昨夜は有難う御座ゐました。お蔭で助かりました。土瓶は戸の外に置かうと思ひましたが、あすこはお寢間らしいから、さうでもない、音でもたてゝはと思つたので、わざと井戸側に置きました。」

私はたとへ短い僅かの時でも、あれ程此の土方をみくびつた事を悔ひました。そして赤面しました。私から恥ぢ入つて仕舞つて、そのてれ隱しに私はこんな事を云つた。

「まあ、さうでしたか。夜業をして、また今朝も仕事を續けて居るのですか。」

「否、なに、代りあつて眠りましたから、何でもありませんや。」

此の男の顔は健康と云ふものゝ權化の様に、光り輝いてゐる。私はそつと家に上りました。空の土瓶は確にラヂユームの流れてゐる井戸側に置いてありました。

其の夕方歸りました兄に、此の話をした私は、自分の犯した罪を悔改める神の子の様な氣持ちになつた。そして、私の心には、總ての者を抱擁する事の出來る様な愛の泉が滾々としてつきず流れる様に思はれました。

或る日の午下り、私はふとした氣まぐれから、それ以來、戸棚の奥に入れてあつたマンドリンを取出しました。そして何の選擇もなしに、丁度開けられた譜(それはトレアドール、ソングでした。)を彈き初めました。此の樂器獨特なもの柔い旋律は、春に目覺めた乙女子の啜泣きの様に靜かな自然を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふるはせる。悲しいばかりではなく花やかなうちの悲哀と云つた樣な音律である。私は手を動してゐる内に、次第に興がのつて來まして、幾度となく繰返しました。

何の氣なしにふと心付くと、庭の四目垣の上には、茜色の荒くれた、しかも物に魅せられた樣に優しい目を持つた顔が、十二三並んで、マンドリンの旋律に耳傾けてゐるのである。今は前の河に働く土方達の晝休みと見える。私は彼等の爲に何なりと自分の出來る事なら、してやりたいと思つて、手を止め椽に出て聲をかけました。

「貴方達は何が一番好きですか。もし、その好きなもので、私の彈けるものなら聞かせませう。」

勞働者の群れには笑みが流れた。そして相談するらしい小聲が少時續いて、中の一人、(それは私を先の夜、訪れた男。)が、私の問ひに答へる爲に前へ出ました。

「奥さん、私達は活動寫眞が好きなんです。それであの寫眞をやる時、よい音のものを彈きますね。あの樣なのをやつて下さいませんか。」

「あゝ、ピアノで彈く樣なのですね。さう、同じ樣なのをやつて見ませう。」

私はそれから活動寫眞で聞覺えのものを、三つ四つ片端から彈きました。垣の上の彼等の頭には、恐らくその曲から聯想した美しい谷川の流れや、喜劇役者の大立物、メーベル、ノーマンドのにこやかな顔、さては彼等の目を自ら潤ませる樣な物悲しい映畫(フィルム)が、何くれとなく描き出された事と思ひます。

手を小止みなく動してゐる私の心は、眞實によい事をしてゐると云ふ觀念で滿ちました。勞働者と一口に云へば、只それだけで亂暴な恐ろしい事を何の容赦もなく、してのける者の樣に女子供は思つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てゐる。然し、今、私の目前に並ぶどの顏にも、そんな事は影さへ見えないのでした。かうした音樂と云ふものが、私と彼等とを結びつけてゐる平らかな光景が、あれでも十五分以上續きましたらうか。やがて、紺碧の眞夏の夜の空を、西から北へ流れる流星の樣に突如として起つた。

「やい〳〵、手前達はいつ迄も何してやがるんだ。さつさと働かねえのか。」

と云ふ恐ろしいどぎつい聲に皆一樣に驚かされました。彼等は口々に何か、言ひ罵りながら、各自仕事につく〴〵、土手を下りて行つた。一人になると又氣の向くまゝに、マンドリンをかき鳴してゐた私が、目を上げると、皆殘らず去つた筈の垣の外に、ふらりと寄添ふ若い男がある。

「奧さん、實に何とも言へない、好い音で御座ゐますね。」

「貴方は音樂が好きと見えますね。其處に居ると、又さつきの恐ろしい聲を聞かねばならないから、その戶を開けて此方へお入りなさい。」

「へえ、有難う御座ゐます。それぢや入らして頂きます。」

柴折戶を開けて、おづ〳〵と庭先に入つて來た彼の顏をよく見ると、勞働者にはふさはしくない、何處やら病身らしい肉體を持つた、胸には到底癒やされる事の出來ぬ、心の深い傷手を抱いて居るかの樣に、沈んだ樣子をして居る。

「さあ、此處へおかけなさい。每日此の暑さに働くのは、大變ですね。午飯の時は何處からかお茶でも出ますの。」

「否、奧さん、どう致しまして。茶どころですか、水さへ吳れるものはありやしません。私達土方などは、人間として取扱はれないのでさあ。情けないが仕樣がありませんや。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私は此の男の言葉を聞いて、非常に暗い氣持ちになりました。「私達は人間として、取扱はれないのでさあ。」まあ、何と云ふ悲痛な言ひ方でせう。人間と生れ、人間として取扱はれない。これ程腹立たしい事が、またとありませうか。私は森の中の湖の樣に、何處やら神祕的な淋しさを持つた此の男の目を、今更らしく見詰めました。

「貴方は子供さんがありますか。」

子供なりとあるならば、その前の日、母が持つて來て吳れた菓子を土産にやりたいものを、と云ふ心から私は此の問を發しました。すると彼の顏に、白壁にパッ〳〵と映る稻妻の樣な、ほんの瞬間ではあるが、强い悲しみが通り過ぎるのを見ました。

「奧さん、私には子供はありません。」

椽から臺石にそろへた泥にまみれた兩足の先に、目を落しながら、彼は言葉を切つた。

さう。それぢやお女房さんは。」

「家內はありましたけれど、つい先月二十三で亡りました。さつき奧さんがその好い聲を聞かして下すつた時に、私はその家內の事をふつと思ひ出してしまひました。女々しいと笑つて下さいますな。亭主となり、家內となれば、使ひ古したものを捨てる樣に、そんなに思ひ切りよく出來るものぢやありません。」

「御もつともです。貴方の云はれるその心持ちは、私によく解ります。一人で死んだお女房さんも、氣の毒には違ひない。けれども生き殘つた貴方は、倘可哀想ですわ。」

「何處へ行つたつて、私は人に對して、何くそと云ふ樣な心を持つてゐる。それは相手が自分を馬鹿に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

してかゝるのが、腹立たしくて癪に障るからです。けれど奥さん、私は勿體ないが奥さんから、友達の樣に丁寧に取扱はれて、まあ何年ぶりか、今日はこんな喧嘩腰をぬきにした柔い心持ちになりました。何とお禮を云つたらよいか、私にや解らないんでさあ。」

「私はお禮を云はれる理由がありませんわ。私の貴方にした事は人間として、當然の事ですもの。」

「けれど、先程も云つた樣に、世間は奧さんの樣にして吳れませんや。あ、大變お邪魔を致しました。彼方へ行つて働きます。」

彼は一禮して、急ぎ足に庭を出て河へ下りて行きました。暑い日ざしは働きに行く男の背を焦す樣にさして居る。

事實はこれだけなので御座います。けれど私は大分此の若い土方の話から、種々の事を考へさせられました。Kさん。それを私はあなたに、お話ししたいのです。

此の男が亡き妻を愛する心根は、實に人間として立派なものではありますまいか。使ひ古したものを捨てる樣にさう思ひ切りよくは出來ないと彼は云ひました。確にさうあらねばならぬわけで御座います。

私の考へでは愛の存在しない夫婦關係、換言すれば、只單に本能によつて結びつけられたものは、嚴正な意味で眞の夫婦とは云へないと思ふのです。本能のみで結び付けられてゐるならば、そりや他の動物と、何等異る所がありませんもの。

小川のほとりで、若草を喰む一對の牛があるとして、その牝牛が、ふとした事から殺されてしまひ、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

牡牛のみこの世に、ぽつんと取殘されたと致します。しかも牡牛は自分の生の道伴(みちづれ)であるべき牝牛の死に對して、少しの悲しみも感じないで、ありし日と異ならず若草を喰むでゐる。少くも人間はこの牡牛とは、異る可き筈で御座ゐます。ところが世間には地位名望から云つて、此の男より、總てに價値づけられてゐる人で、此の男程、妻を愛する者が幾人ありませうか。

妻が不治の病(やまひ)にかゝつて、今や瀕死の床に呻吟して居る時、其の夫たる人は、赤い灯の町に美妓を擁し、酒池肉林の快樂を恣にしゝゐる。かうした人が若い勞働者に比して、教育もあり、頭もあると、人も許し、自分も許す人々であるから、とてもお話にならない。一般に私が目撃する結婚の殆ど大部分が、餘り形式に囚はれて、第一義であるべき二人の間の愛を輕視するから、かうした結果を生むのです。これは人間として眞實に可歎(なげかは)しい事で御座ゐます。此の結果の惡い影響は流れ流れて、どの位世の中に毒草を生ひ繁らせる事か解りませんもの。

私は所謂人道(ヒユーマニテイ)と云ふものではないが、眞の意味のヒユーマニテイを、教養されたる階級に見出す事が出來ないで、反つて下層社會により多く見る事の出來るのを初めて知り、非常にうれしく思ひました。

Kさん。私の此の長つたらしい手紙は、もう貴方を飽(あ)きさせてしまつたでせう。そろ〳〵ペンを措く事にしませう。

今日も河掘工事は續けられてゐる。今、私の坐つて居る所迄彼等の手の働きと共に、進めらるゝ歌の節が青田を渡る風に乘せられて聞えて來ます。あの働いてゐる人達は私が貴方へ、かうした手紙を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

書いてゐる事は、恐らく知らないでせう。申す迄もなく知る筈はありませんもの。

これから、私は河線の小道を生垣について、野の中の道を、ものゝ三丁も行き、山の手線の電車の通るガードの向ふ迄、此の手紙を投函しに行きます。生れて以來、あの黑い冠木門の外へは、一人で一歩も出た事のない私が、自由に行動をとり、出來るだけ總てのものを見聞して、生活内容を豐富にしたいと願つてゐるのです。

Kさん。貴方は確にそれを喜んで下さいませう。

此の夏草の繁みより、かうした手紙が都會の貴方のお手に入る、その時を想像して、私は笑ましげな心になりました。それぢやこれで失禮します。御體をお大切に。さよなら。

大正五、九、一〇。

疑惑

原阿佐緒

瓦屋根には黄昏に近い鈍い光が漂つて、暗い陰影に染められた狹い庭には、短い線のやうに細い青草が寒さうに震へて、うす汚たない土色の朽葉が音もなく舞ふてゐるのが見えた。其處には子供らが投げ捨てた蜜柑の皮や壞れた玩具の銀のやうな鈴などが散らかつてゐた。硝子窓の破れた處から、天井の煙出しから身に沁むやうな風が這入つて來ては幾度か小枝子の肩を戰慄かせた。

窓の一方から來る薄明りに、手を差し出して眼鏡を頼りに縫物をしてゐる母親に、斜に坐つてゐた小枝子は、

「はい、旦那さんから……」と平素の世辭笑ひをしながら配達夫の置いて行つた手紙の封を切つた小枝子は、一行目に眼を通した許りで何となく不祥な豫覺に胸を衝かれた。

啓、金を送る前に一度返事を呉れと云ふ、此の手紙の如何に依つては金を送らない積りであらうか、僕の心にはさして惡意があるわけではないが、爾うした計略的の言葉を聞くと誰でも氣に障らないでは居られないではないか、婿と云ふ者を惡魔のやうに思つて警戒してる處の見えるお母さんの心

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

持がいやなのだ、そんな婿なら最初から貰はない方が宜いではないか。

お前の誠意は知つてる、惡意のないことも解つてる、唯お母さんはこつちで考へてない事までも考へては僕を前科者あつかひにしてる點が見えるのが厭やだ、妥協する心は充分あつてもお母さんの心が悉くひねくれて居ては仕方があるまいと思ふ、然し今日の婿の制度と云ふものは一から十まで姑に從ふと云ふ樣な昔風のものではない、自分の存在を失つてまでも其の家が大事な時代ではない、宮澤（小枝子の生地、假の名）の殿樣に對して葉山家の存失する場合の婿とは大分違ふ、今日は婿は金で釣らねばならぬ、人間を金錢で買ふ制度に變つた以上は當方に無一物である時に其の家の存在はもう無いと見ても宜い、つまり買ひ得る婿が國の何處にもないからだ。

幸に葉山家には僅かの財があつた爲めに僕丈のものを買ひ得た、其の引留策は葉山家で充分すべきもので、若し其の引留がない時は婿殿は何時でも出て行く性質を帶びて居る。

お母さんの考へでは婿が離緣でもされゝば浪人にでもなつて一生世にかくれて暮らさねばならぬ者と思つてるらしい。今日では編笠はかぶらずに濟むことを知らせてやりたい。

婿殿の全べての惡い事は離緣に依つて解決されると同時に、其れに因る損害は養家の方が遙かに上にある樣になつた。僕に充分氣に入らぬ點があれば謹んで離緣されるのを待つて居らう、敢て執着はせぬ積りだから。

お前もさうだ。二十三十の金で亭主を賣らうとする樣な心になつたら、勿論山も畑も賣つて良人に貢ぐ心もあるまい、そんな者の亭主には小學校の敎員位の處が適當だ、山の中で草でも刈り乍ら虫のやうな一生を送つたらよからう、僕は出來るだけ宮澤の事を思ふまいとつとめてゐる、妻子の事を思

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふと胸が痛くなるから一時でも多く樂天的な生活を望む爲めに强いて忘れるやうに心がけて居る、もう初美なんかどうでも宜い、僕を窮境から救つて呉れるものも、世の中が廣いからあるだらう、子供なんか無い方がいくら氣樂で宜いか知れぬ、不景氣な事は云つて呉れるな、感興を殺ぐ樣な言葉は云つて呉れるな、もう仙臺なんかへは行くまい、金も送つて呉れなくともいゝ、どうせ送つては呉れまいけれど、一人になつて氣樂に遊んで居よう、お母さんが愛想を盡して離縁狀を呉れるなら立派に印を捺してやる。

自暴の生活に僕も入りかけた、皆新らしい家庭のなせる罪である、お前もお前で一向に妻らしくないのもその一つだ、生意氣なことを亭主に云ふのみで何一つ家庭的な働きがあるか、もつと／＼從順な優しい女を探がさなければならぬ、其れがいやなら母も何も皆捨てゝ上京して罪を闕下に謝せ。

僕がお前を全く自分の思ひ通りになるまで從順に陶冶する事が出來なければ何時でも見捨てるからさう思へ。

僕が敢へてお母さんに詞を奉る「若し葉山家を泰山の安きに置き未來の發展を望むならば何事も婿の意志に從ひなされ。山を賣らうとも田を賣らうとも擧つて都に移り棲むとも、舊弊を打破して婿の行爲に決して反對なさるな、若し其の婿を見す／＼逃がして再び婿をとる樣な事があれば事は益々非にして葉山家全部は非常な不幸を見なければならぬ、而もその婿を引留めるのは早急の間にある、東京の一角には早や窮境の婿が他人の手に救はれんとしつゝある、やがて婿の心は强者の手に移るであらう、資力を措しむは今ではない」と申上げろ。

某月某日　　功

小枝どの

恁うした手紙を讀み終へるまでの小枝子の苦痛の表情は名狀しがたいものがあつた。憤怒から嘲笑に、嘲笑から憐憫に、憐憫から同情に、同情から悲哀に、それらをつき交へた痛烈な感情に小枝子の心はずた〳〵に引き裂かれた。

小枝子は殆ど讀むに堪へないで幾度か腹の底から絞り出すやうな遣瀨ない息と共に肩を震はして眼を閉ぢて見たが、一分間も同じ態度を保つてる事が出來なかつた。開くともなく眼は、半紙に墨で書いた文字の上を走つてゐた。

讀終はゐと小枝子は、眞蒼になりながら再び手に觸るゝさへ恐ろしいと云つた風に、急いで封筒に入れて、つと膝の下に入れたつきり、懐手をしたまゝ何處を見るともなく庭の方に眼を遣つた、娘の例のヒステリックに吊り上がつた眼の特殊な光と痙攣する口のあたりをちらと見た母親は脅かされたやうに、不安な聲をしながら、而して優しく、出來る丈娘の氣に障らないやうに訊いた。

「何と云つて寄越したの？　あれ丈けで澤山だと云ふのかえ？……」小枝子はそれには答へず默つて心の中で手紙に對して一々答をして居た。

「金を送る前に返事を……と云つたのも足りなければ出來ないまでもどうにかまた都合をしなければならないと思つたからではないか、それは、お母さんの心には些しは不安もあつたかはしれないけれど、それは云つて寄越した半分しか送れないのだから、全部送つて寄越さない中は、歸れないといつてその中にみんな使つて終つては、また後から送る金をこしらへてる間に日が經つて、またたさなければならぬやうになる、有る物を送るのならわけはないけれど……出來ることなら、それで間に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

合はして貰ひたい、出來なければ最小額の見つもりを云つてよこして貰ひたい……そんな心で返事を待つたのではないか、然しこの事は母親が失禮な考へであつたかもしれないとしても……この不誠實な不眞面目な心は如何したものだらう……」

「足りなくつて歸へれないと云ふのかえ？ 默つてゝは解らないぢやないか」

「何でもないのですよ、たゞね、お母さんの思ひ通りに解決る時が來たのです、」

と皮肉に而して恨めしさうな眼付きをして母親の顏を見据ゑた。

「何でもないと云つたつて……當方にも都合があるから、あの位では足りなくつて歸れないと云ふのか何だかを訊いてるのぢやないか」

「澤山なんでせうよ」

母親は底意地の惡い娘の——お母さんの思ひ通に解決める時が來たと云つたことも意味をとり違へてか、それには何とも云はなかつたのを、小枝子は矢張り親子の間柄だと思つたりした。

「それで歸ると云ふの？」念を押した。

「歸るでせう、然しね、お母さん、功では母さんの心持ちなんて云ふものをちやんと讀んでゐますよ、返事を貰つてからと云つたので、功では前科者あつかひにしてると云ふのです、もう金のことなんかどうでもいゝのでせう」

「そんな云ひがゝりばかり云つて……」

針を持つた手を膝に置いてしんみり吐息をしてる母親の悲しげな姿が心弱い小枝子の淚を誘つたが何だかそれがまた態とらしく見えて憎らしいやうな氣もしながら邪見らしく

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「お母さんから離緣狀が來たら立派に印は捺してやると云ふのだから……」と聲を呑んだ。
「誰も離緣しようなんて云つてやしないぢやないか」
「口で云はなければ解らないやうな人間ばかりぢやないわ」
爾う云つた小枝子の眼は一層もの凄い光に輝いてゐた。而して涙が一つぱいになつた。
風邪を引いて一週間ばかり前から咳の爲に聲が少しも出なくなつてゐたので、母親にとつては斯うした時の例の小枝子の疳高な慓へ〴〵ものを云ふその聲に脅やかされて命を切りこまざかれるやうな思ひを今日は爲さずに濟んだらうと小枝子はふと可笑しくなつたりした。
小枝子の興奮した心は妙な意地を張つて見たくなつて、本家の娘に負ふして外から泣きながら歸つて來た初美に優しい言葉をかけようともしなかつた。最も一生懸命になつて漸つと自分が聞きとれるほどの聲しか出ないので猶更煩はしく思つたのでもあつたが。
「お小枝、何とか言葉をかけてやつたらいゝぢやないか」
「初ちやんが泣いてる時など、斯那聲で何を言つたつて聞えやしないんですもの」と云ひながら抱きおろして乳を含ませ始めた。
「ほんとにお前は氣隨者だね……」
小枝子は薄暗くなつた家の隅々から、寂寥さが自分の身一つに押寄せて來るやうに感じながら、ちろ〳〵と如何にも平和な場景を思はせるやうに柔かに燃えてゐる焚火を凝つと見詰めて、强ひて心を鎭めようとしてゐた。
それは此頃、まだ乳離れのしない初美が何か氣に入らないことでもすると、怒つて泣いて塞いで終

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふ習慣が附いたので小枝子はこれも自分の惡い血を享けたのであらう、それに此頃の自分の精神過勞から來る乳の作用でもあらうかと悲しんだ、其故乳を飲ませる時には出來るだけ心を平靜にして善いことを思はうとするのであつた。

小枝子の父親が飲酒家であつた爲か、小枝子の精神には何處か病的な處があつた。時々襲つて來るその病的な發作に自ら苦しんでゐるのであつた。恁した小枝子には思ひ出すさへ慄然とするやうな追憶が二つ三つあつた。白く光る粉末の藥、燒の匂ひの鮮やかな冷い光を放つ一尺に足らぬ刃物、それらは何よりも小枝子にとつて魅力あるものであつた、爾うした物も遂に小枝子の生命を滅ぼすに至らずに今日猶苦痛の中に生存して居る自分の不思議な生の力を思はずには居られないのであつた。

小枝子は初美を抱いて廊下へ出て來て冷たい暗い空を見あげたが、西の方にはうすい金星の光がチラ〳〵してゐた。

「明日はお天氣がいゝかしら……初ちやんあした仙臺へ行きませうね」と突然云つた。

ランプを掃除してゐた女中の利代が驚いたやうに、「ほんたうで御座いますか奧樣、旦那樣が仙臺までもう被來つたので御座いますか」と聲をかけた。

「ほんたうだとも、お前坊ちやんを負ぶして鞄を一つさげて谷崎(假の名)まで歩けるかえ、だめだらうね―たつた一里だけれど」

「歩けるには歩けますが……」とランプに灯を入れながら疑はしさうな眼を母親の靜の顏に向けて、靜からほんとうの答へを訊かうとしてるらしいのが小枝子には腹立たしかつた。

「行けるもんかね、咳をしては胸が痛いの肋骨が痛いのつて云つてゐながら、それに初美も咳をして

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るぢやないか…………と云つてるのが見えた。

「いえ、行きます、家に居たつて初美を外へ出さないと云ふわけぢやないんだから………」

「遣らないと云つても逃げてゞも行く」と心に囁きながら強い決心を籠めた聲音で判然云つた。

其處へ幹一が竹馬に乘つて歸つて來た。祖母が儼然めしい顏して煙草を吸つてるのと、母親の蒼い神經的な顏との間に流れてゐる不安の沈默に幹一は云ひしれぬ壓迫を感じて、おど／＼しながら爐端に坐つて、後の方へ手をやりながら頻りに泥だらけの足袋を脫いでゐると、豫期した祖母の小言が始まつた。

「お前ばかりもお祖母さんの云ふことを聞いて呉れないでは困るぢやないか、何故燈火がつくまで遊んでゐるんです、日の暮れるまで遊んでる人があるもんですか」と自棄な調子で小枝子に當擦るやうに云つた。平素なら何か理窟を云つて祖母をやりこめる處であつたが、前に母親の眼が光つてゐるので澁く「はい」と云つた。幹一はそれほど腕白者であつた。

小枝子は母親の言葉に一層氣を苛立たせて、

「幹ちやんもまた奈何してさう忘れるの？あれほどお母さんが云つて置いたことを、さ、御飯を食べて早く日記をお書きなさい」とこれも冷たい聲で云つた。然し小枝子は心の中で幹一を強く抱きしめて泣いた。

幹一は二人の間に何か事件が起つたのだと察しないわけには行かなかつた。而して何でもそれが東京の父親のについてゞはないかとうす／＼感じたらしかつた。

「お父さん矢張り歸つて被來るの？　初ちやんのお誕生日までに？　え、お母さん………」と、母親

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

親の機嫌をとる心草で云つた。

「え、お歸りなさるでせう、これから大人しくしなければいけませんよ」

「幹一がきかないから歸つて被下らないだらう」

恁那事を祖母が云つた。

小枝子の胸はいつか東京へゆくより他に道がないと云ふやうな心持で一杯になつて居た。

夕飯の時も母親には一言も物を言はなかつた。小枝子は頭痛がして仕樣がないからと初美をわざと女中に頼んで、暗い廊下を蹌踉くやうに歩いて自分の居室の机の前に坐つた。

本箱かの上に乘せて置いたと利代の云つた小さいランプとマッチを手探りにして、それを點もした。パッと明るい光が重く暗らい小枝子の腦に痛いやうに觸れた。

小枝子は周章てゝ芯を細くして机の左端に置いた。而して燃えるやうに熱い右手で額を押へて眼を閉ぢた小枝子は凝結したかのやうに身じろぎもしなかつた。

明日は日曜日だから坂井は家に居るに相違ない、八重垣町（仙臺のある町名、假の名、功の實家のある所）へは父樣が心配なさるから行かない方がいゝだらう、一層この手紙を兄樣（功の實兄）に見て頂いて奈何したらいゝかを御相談しようか、否恁那ことは出來ない、矢張り何も云はずに坂井の家からそつと汽車に乘つて了つた方が宜い、坂井は驚くだらう、而して自分の上京を喜んで呉れるであらう、然しその動機を作つた功の手紙の内容を知つたら……、幾分良人に同情は持つても、全然同感することは出來ないだらう、手紙に就いては何も云ふまい、然し斯う云ふ手紙を貰ふやうになつた原因は？坂井が小枝子の獨居生活に同情して、功との同居を忙がせる爲めに、先づ物質的生活の安易を計つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、仙臺の印刷會社の圖按課長に推薦した。それが原因であつた。而して小枝子も郷里に近くつて便利ではあるまいか、厭でなかつたら、自分たちの幸福の爲に來ては呉れまいか、仙臺のお祖父さんや叔父さん達に親しむことの出來る初美が幸福である………と云ふやうなことを云つたそれの返事として、二三十の金で亭主を買らうとする樣な心になつたら………と云ふ言葉の下に小枝子の潔白な心は容赦もなく蹂躪されて了つたのであつた。

小枝子はそれにしても坂井の好意を無にしてはならないと思つた。坂井の好意に報いるには自分は奈何しても東京へ行つて良人の心を自分の上に取戻さなければならない。と小枝子は決心を固くした。坂井は彼女と同年の異性であつた。そして文藝上の友であつた。小枝子の獨居生活の沈默も山住ひの侘しい語るべき友もない時に、坂井はよく思想上の話などをしては、小枝子の心を刺戟し、はげましてくれた。功と結婚の前にも、小枝子は五里の道を自働車で飛んで來た彼れに、功と自分の過去の美くしい華々しい戀物語りを、彼の歸途を送くる山路で、「野の舞臺」と云ひたいやうな場所ね——と云ひながら、山の上のすこし平らな處に蹲踞むで、自分の幸福を歡喜に滿ちた聲で語つたことがあつた。その功の名がはしなくも坂井の幼い時の印象をよみがへらせた。坂井は功を知つてゐたのであつた。坂井は小枝子の結婚に滿腔の歡びを見せて同感してくれた。あなたの藝術の爲めに改革期を作り、これから益々充實した生活に、あなたは幸福に藝術に侵つて行くことが出來るでせう……と云つた坂井の言葉と、あの紛雪のふり出した山道を遠ざかつて行く彼の後姿と、あのむら〳〵した柔らかなうす濕りの土から芽ぐんだばかりの草の芽から見出した赤い實を吾知らず髮に挾んで來たのを翌朝髮を梳く時にこぼれた……　爾うした詩的情緒を小枝子は時に思ひ出したりすることもあつた。

恁うした友人關係を持つた坂井を功はよく知つてゐた。坂井の宗教的な高潔な生格に、疑ひや嫉妬を伴ふ餘裕がなかつた功の心をも小枝子は安心して信じてゐるのであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

疾風の如くに

山田たづ

一

明るい五月の太陽は優子の白い琥珀の洋傘の面を銀色に焦げ附かして居た。初夏の郊外は只見る限り瑞々しい緑の波で、吹き過ぎる微風も若葉の香を匂はせて素絹の手觸りのやうに淸々しかつた。優子は二三度も人に訊ねたり、同じ邊りを幾度も行き歸りしたりして漸と訊ね當てた光川氏の玄關に立つた時は、ほつとしたやうな安心と、同時に迫つて來るやうな胸のときめきに、何となく身體の線が堅く成るやうな感じがした。

瀟洒な、質素な、見るから明るげな小さな洋館で、これと云つて見る程の雜木もない小やかな庭には幾つかの切株から延び出た萩の若芽が、黑い土の上を鮮やかな淺緑で刺繡のやうに綴つて居る。家の中はひつそりと人影もないやうに寂として居た。二三度も鈴を推した後に、やがてガタンと階上の恰度眞上と思はれる邊りの扉の開く音がして、階段にそそくさとした上履の音が聞えたと思ふと、直ぐ豫て見知越の光川氏が姿を顯はした。

『やア、さア何卒』と、光川氏は先へ立つて玄關から直ぐ續く螺旋狀に成つた階段を駈け上るやうに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

しながら、優子を技術室(アトリエ)に案内した。
疊ならば十疊餘りも敷けるかと思はれる位な廣さの、眩しい位に明るい部屋で、床には絨氈模樣の新しいカーペットが敷き詰めてある。周圍の壁には油繪やら素描やらさまぐ\な懸額、中で未だ漸と五つか六つ位だと思はれる愛らしい日本の少女の油繪の肖像が不圖彼女の眼を惹いた。

『何うも大變取散らかして居ります。それに今日は生憎皆留守でしてね』と、光川氏は言ひながら、片隅の卓子の上を取片附けたり、室の眞中の其處で應接することに成つてるらしい圓卓子の上の外國の美術雜誌の位置を正したりしてから優子に臂掛椅子を侑めて、自分もそれと向ひ合つた舟底形をした安樂椅子に腰を卸した。

『先達て平野君からお話は好く伺ひましたが、何ですね、是迄日本畫の方をお遣りに成つたのだ相で』と、光川氏は稍在つてから先づ言ひ出した。少し着古した大島の袷を纖細(デリケート)な――男で斯う云ふ線を有つた人があるのかと思はれるやうな――身體に緩く纏つて、上半身を安樂椅子の上に延ばすやうに臂掛の處に凭つ懸つて居た。

『いゝえ、致したと云ふ程でも、――ほんの眞似事だけで御座います。』

室の中はしいん――と、呼吸の音迄もはつきりと聞える程の靜けさである――今何かゝかたりと音を立てゝも、それが何んなにか此靜かな室内に飛立つ程の大きな反響を與へるだらうと思はれるやうな靜けさである。圓卓子の上のクリーム地に水仙を自然色のまゝでエジプト式の圖按にした陶器の花瓶に挿された鮮紅色のチューリップの花が、此閉ぢ切つた室の內の明るい暖かさに蒸されて、空氣に觸れた血潮のやうに、少しづゝ黒ずんで行くのが眼に見えるやうである……

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『逆上せますか、少し窓を開けませうか。』光川氏はぽつと上氣した優子の顏色を見ながら椅子から立上つた。

白い窓掛をひら〳〵させて、爽やかな風が水のやうに流れ込んだ。空が少し曇つて來たと見えて、日の光が燻されたやうに濁つて居る。町の黑い甍の波の上に頭を泛べて居る樹立の色が鬱陶しげな暗綠の色を加へて來た。

『何だか私は閉め切つた室が所好でしてね』と、座に歸つた時、光川氏が言つた。『此頃のやうな生溫い風の吹く日なぞ、開け放したまゝで居ると何だか氣が落着きませんよ』と、蒼味を帶びた額に懸つた長い髮の毛を搔き上げて、眼を下に使ひながら言つた。白い――とは言はれない、暗黃色――と云つても決して感じの惡いそれではない――をした顏は深い悒欝に沈んで、此間畫家の平野の家の茶の會で會つた時のやうな輕快な明るい態度は影も見られなかつた、年齡もあの時よりはずつと更けて見える。其代り其悒欝が其人を、一層高貴にはして見せた。

不圖階段に足音が聞えたので、優子とつと氣息を呑んだ。と、直ぐ扉が開いて四つか五つ位の友禪づくめの服裝をした愛らしい女の兒がころころと轉ぶやうに這入つて來た。續いて姿を顯したのは夫人であつた。ふつさりとした黑い髮の毛、艶の好い色白な顏、描いたやうな濃い眉、涼しい黑眼勝の瞳、きつちりと輪廓の整つたと云ふやうな顏立ではないが、何處となく人を惹き着ける處があつた。華美な米琉の對の羽織と袷を着て、紅い疋田模樣の襦袢の袖がちらりと振を溢れて見える。打見は二十三四とも思はれるが、實の處七八にも成るのであらう、それにしては少し華美な扮裝ではあつた。

『此間、平野さんからお話のあつた卿田さんだ……』

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ちらと優子の方へ眼を走らせた夫人に向つて直ぐ光川氏が言つた。そして優子に『家内です』と、紹介した。二人の女性は慇懃な初對面の挨拶を交はしたのであつた。

『何うも大變汚くろしい處で』と、夫人は愼しやかに言ひながら、床に落ち散つた新聞氏を拾ひ上げたり、一寸邊りを取片付けたりして居たが、『あゝ、まだお茶も差上げないで』と、言つて急いで扉の外へ出て行かうとした。

『如何だつた、富美の病氣は』と、光川氏は直ぐ其後から聲を懸けて『別に何ともないつて言つたのか。』

『えゝ、只一寸氣管を痛めて居るつて言ひました。濕布をして温かな部屋に居れば好いさうで御座います。』

『また可厭な濕布』と、光川氏は笑つた眼で子供を見た。

『父ちやん』と、女兒は母親の姿が消えると別にそれを追ひ縋りもせずに、ひたと父親に纒つて行つた。

『おゝ如何した、女中に背負して何處へ行つたの』と、光川氏は赤いリボンを鉢巻にしたかぶきりの小さな頭を兩手の掌に挾んで、膝許に引寄せながら抱き上げて、『おゝ、でも大分熱が激いよ』と、括れたやうに圓々した小さな手首を掴みながら、考へるやうな眼附をして言つた。

『さア、小母さんにお叩頭を忘れて居たな』と、光川氏は左樣言つて、笑ひながら女兒を膝から卸して優子の方へ向かせた。

『此兒はね、斯んなにして始終病氣ばかりして居るので困ります。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

加減の惡い故であらう、ふつくらとした頬は血の氣もなく只白かつた。唇も褪せた花瓣のやうに白ざけて居る。大きな黑い眼は凝乎と沈澱んだやうに一所を見詰めて居て動かない、眉の邊り、それから眼を少し下向き加減に伏せる悒鬱な癖迄父親そつくりの兒であつた。

少時して女中が珈琲を運んで來たきり、夫人は姿を見せなかつた。

『何卒冷めません間に』と、光川氏は優子にそれを侑めて、自分も銀色をした盆から下皿毎茶碗を取り上げて一口啜りながら女兒を見て、

「こりや、お前さんには不可ない、富美ちやんは階下へ行つて、母さんにお牛乳をお貰ひなさい。」

そして、『和さん、和さん』と、光川氏は夫人を喚んだ。

『御用で御座いますか』と、直ぐ階段の下邊りで夫人の聲が聞えた。

『あゝ、富美を階下へ伴れて行つて下さい。』

やがて姿を顯した夫人に、

『大分熱が有るよ、此兒は今に死ん仕舞ふよ、早く寫眞でも撮つて置きなさい。』

夫人は戲談だと思つたのであらう、ちらと笑つた顏を優子と見交しながら、良人の膝から子供を抱き取つて、『本當で御座いますか知ら』と、自分の頬を女兒の額に押附けたが、『そんなでもありませんわ』

と、直ぐ眼を子供から放して良人を見た。

『早く伴れてお出、そして暖かにして寢かせて遣りなさい。』

そして、で背後からまた『最う五月蠅いから死んだつて可いよ』と、呟いた。其聲には何となく鋭どい刄物の尖先を見るやうなひやりとした冷たさが含まれて居た。が、夫人は只戲談にして、輕やか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

な笑ひ聲の響を殘したまゝ、扉の外に姿を隱した。

『お孃樣お一人だけで被座しやいますか』と、優子は閉まつた扉から眼を放しながら光川氏の方へ向返つて言つた。

『いえ、最一人彼兒の姉が居ます、八つでしてね、恰度此春から學校へ行くやうに成りました』と、光川氏は急に傍の壁の方を振仰ぎながら、『彼兒ですよ、あれが其兒です』と、其處に在る少女の油繪の肖像を眼で差示すやうにした。

『まア、お可愛いゝ……先生がお描きに成つたので御座いますか。』

『いえ、榊君が描いて吳れたのですよ、恰度今の下の子供位の時ですがね、此頃は少しこれとは顏附が違つて來たやうです、反つて妹の方がこれに似て來ました。』

そして、なほ言葉を續けながら、

『最うそんな大きな女兒の親父ですからね、私もくず〳〵しちや居られませんよ』と、光川氏は苦笑するやうな表情をした。

夕日が手繰り寄せた窓掛の間から漲るやうに、恰度夜の灯影を見るやうな黃ろい色をしてカーペットの上に落ちて來た。何時の間にか空はすつかり晴れたらしい。風も少し出たと見えて、若葉の木立はざわ〳〵と匂ふやうな綠の波を搖つて居る。初夏の空氣には何となく新しい果物を裂いたやうな、芳醇な或刺戟が含まれて居た。

以後每週木曜日每に、出來ても、出來なくつても幾枚かの製作品を持つて此技術室を訪ふことに話が定まつて、優子は此處を辭さうとした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『何うかまア熱心に遣つて下さい、是迄もそんなことを言つて來た人がちよく〳〵ありますが、女の方は何うも皆長續きがしないので張合ひが有りませんよ。眞面目に藝術を研究すると云ふやうなのではなく、只ほんの琴か、挿花でもお稽古するやうなんですからね――貴方を左樣だつて云ふのぢやありませんが、是迄の人がですね――』光川氏は椅子を立つてからもまだそんなことを言つた。そして歩き掛けながら、

『未だ貴方の他にもそんな人が一人二人在りますがね、また今度それ等の人達とも此室へ集まつてお茶でも飲みながら話しませう。』

音を聞き着けて、夫人も莞爾やかな笑顔を見せながら見送りに出て來た。

二

次の木曜日には優子はまた此技術室を訪れた。

最う氣候は餘程夏に近い狀況を示して居た。空は强い色に澄んで、靑葉は滅切り黑みを增して來た。町には新柄のセルの單衣なぞ纏つた瀟洒な男女の姿が見られる時分である。

女中に導かれて、例の圓卓子の傍に待つて居ると、程なく上つて來たのは、眞赤なフランネルの着物を着せた女兒を抱いた夫人であつた。今日は頭髮を分髮の束髮にして、白つぽいネルの單衣に藤色の絞りの羽二重の帶を背負ひ上げなしに輕さうにお太皷に結んで居た。無地の金紗縮緬の半衿も矢張り藤色であつた。

『只今子供を伴れまして、一寸近隣迄散歩に出懸けまして御座いますが、直ぐ歸つて來るから、お出でに成つたらお待ちを願ふやうにつて申して居りました。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夫人は相手に椅子を侑めて、自分も腰を卸すと直ぐに左樣言つた。頭髮の變つた故であらう、何だか此間とは顏附が違つて見える。佛蘭西の女優の寫眞に見るやうな圓い恰好の好いカーブをした顎、少し厚目な唇、何かの彫像に見るやうな肉の厚い高い鼻、長い睫毛の下に輝く濡れたやうな艶のある大きな眼、が、全體として見ては何となく動きがない、ぱつと鮮やかに咲いた花を見るやうな生々した表情がない、其美しさが造り花を見るやうな美しさなのが、缺點と云へば、云はれるのでもあつた。

『大分お暑く成りましたのね。』夫人は親しげな口を利きながら子供を下に卸して、窓を開けに立つた。きら〳〵と白金色の光線の渦を描きながら、硝子戸は殆ど夏に變らない强さに照り着けられて居る。

『まア晴々致しましたわ、一寸被入して御覽なさいまし』と、夫人は眩し相に强い光から眼を反向けて、窓枠に片手を懸けたまゝ此方を振向いた。さつと白い窓掛が帆に風を孕んで、後れ毛がはら〳〵と水の中の藻を見るやうに慄える。何となく左樣他人に容易く打解けて出られない、物に隱する處のあるやうな優子は、未だ昵懇でもない夫人から斯う馴々しく喚懸けられて、一寸返辭にまごつきながら、それでも立つて其傍に近づいた。

『大變、見晴らしが好う御座いますこと……』左樣言つて身丈の高い夫人に並んで立つて、眩し相に外面を眺めた。紫色の靄の彼方に都會の町は、徐ら一つの生物のやうに大きな姿を橫たへて居る。

『ほら彼處に廣い原が見えるでせう、あれが代々木野ですわ、彼處の森――あれが德川さんのお邸ですの。』夫人はそんなに言ひながら、一つ〳〵四邊の風物を指示した。

『まア何ですね、そんな處を蹠つて、汚ないからお止しなさい。』左樣云ふ聲に不圖注意を喚ばれて振向くと、夫人は美しい顏を心持蹙めながら、濡れた白いエプロンの端を女兒の手から引放して其膝に

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

撫で卸して居る處であつた。
『お悧巧ちやんで被坐しやいますのね』と、優子は腰を屈めて女兒の相手に成りながら、『お幾歳で被坐しやいます？』
『四つで御座います。』
『まア隨分お身大きくて被坐しやいますこと！』
『え〻、身體ばかり大きくつても、未だほんの赤兒ですから解らなくつて困ります。』
『最うお加減はお宜しいんで御座いますか。』
『え〻、最うすつかり、何ですか知慧熱りとでも申しますんでせうか、此兒はあんなにして始終熱が出るんで御座いますわ、そして矢張其度毎に少しづ〻知慧が着いて來るやうで御座いますの。』夫人は母親らしい柔かな眼眸に子供を眺めながら溫和な調子で言つた。
何時か又三人は誰から動いたともなしに、元の處に歸つて居た。
『貴方、それではお窮屈で御座いますわ、何卒此方へ御懸けなさいまし』と、夫人は優子が普通の椅子に懸つて居るのを見て、傍の臂掛椅子を侑めた。
つい言葉が切れて、何となく手持無沙汰な時が續く。夫人はさり氣ない振を裝ひながら、折々ちろちろと詮索するやうな瞳を相手に走らせて居る。優子はそれが何となく不愉快であつた、別にさしたることではない、女同志相對して斯う云ふやうに座の白けた時、只普通に感ずる不愉快ではあるが――
『當地の××女學校をお出に成つたんで御座いますつてね？』不圖夫人が口を切つた。
『はア。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『何時頃で被坐しやいます?』
『最う四五年も前で御座います。』
『宅へ被入しやいます太田留子さんと云ふ方で矢張××女學校を出た方が御座いますんですよ——もしお存じぢやありませんか知ら、女優の河合みよしさんと同期ださうで御座いますが?』
『存じませんで御座いますね——河合みよしさんなら私とは二級上で御座いましたが。』
『あ、左樣で御座いますか。』
不圖階下から女の兒の細い透き通るやうな聲がした。續いて光川の聲も聞えた。
『あ、歸つて參つたやうで御座いますわ、一寸失禮致します——さア富美ちやん被入しやい!』
女兒は何時の間にか優子に馴染んで、其膝に纒り着いて居た。そして何と思つたか、ぢろりと圓らな眼を母親の方へ注いだまゝ、急に大きな桃色のリボンを動かして頭を横に棹つた。
『そんなにして小母さんがお五月蠅いぢやありませんか、まア何と云ふ兒でせうね。』夫人は華やかな聲を殘したまゝ、急いで一人で階下に降りて行つた。
入替りに紺色の洋服を着た光川氏が這入つて來た。輕い戶外の運動に微醺を帶びたやうな艶のいゝ顏色をして居る。此間の時とは打つて變つたやうな輕快な容子であつた。斯う云ふ風に其折々の氣分がすつかり表情や態度に表れて仕舞ふ人と見える。
『や、何うも失禮しました。大分お待ち下すつたのですか。』
『いゝえ、それ程でも。』
『今日は女兒に强請られましてね、大分步かせられました』と、光川氏は快活に言ひながら、優子の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

膝に抱かれて居る女兒に眼を注いで、
『貴方、重いからお降ろしに成つて下さい、子供は馴れさせると仕方がありません。』
『いゝえ、お可愛いゝんで御座いますわ。』
『其兒は汚なくつて不可ませんよ、幾許淸麗にして遣らうと思つてもそれ位の時分には直ぐ其處いらを汚して仕舞ひましてね。』
光川氏は大きな聲で夫人を喚びながら、子供を階下へ伴れて行くやうに吩咐けた。其邊り迄來て居たのであらう、果物の皿を手にしながら夫人が直ぐに姿を見せた。
夫人と女兒の姿が階下に隱れると、光川氏は少し椅子を侑めながら、
『其後何かお出來に成りましたか』と、優子の方へ眼を注いだ。
『えゝ、餘まり拙くつて極りが惡いんで御座いますけれど。』優子は左樣言ひながら、傍に置いたメリンスの包みを解いて二三枚の畫板を取出した。それは此一週間の間に近くの原へ寫生に出懸けたり、又荒川の岸の邊り迄も遠出したりした其獲物であつた。
『先日は何うも失禮しました、あの時は非常に疲れて居たので、努めて元氣に話さうと思つてもだん〳〵聲に力がなく成つて仕舞ひましてね——實は生憎あの前の晩も、其前の晩も殆ど徹夜で美術雜誌に出す評論を書いて居たものですから』と、光川氏は畫板から眼を放しながら、不圖想出して言つた。
それから光川氏は今日もまた何となく魅するやうな態度で、物柔らかな言葉附で縷々として盡きることを知らない藝術の話をした。
優子は斯うして每木曜日每に缺かさず此技術室を訪れて居た。其間に氣候はだん〳〵と木の實が熟

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して行くやうに長けて行つて、芳烈な刺戟を帶びた眩しい夏が來た。光川氏は其頃から何となく優子に對するのが惱しく感じ出されて來た。平常から嫋やかな線を有つた優子の肉體は、薄着に成るに伴れて一層纖細に放縱な美しさを添へて來るのであつた。其透き通るやうに美しい血を盛つた純潔な皮膚も――昂奮して情熱に輝いた瞳を見るのも――彼には耐え難い壓迫であつた。其眼の前の美しい肉體に、ぬら〳〵と蛇が蠕動するやうな感じに始終彼は脅かされて居るのであつた。

また優子にも、何と云ふ譯もなく光川氏の其溫かな態度や、柔かな言葉附が或魅力を有つて顯れて來るやうに成つた。彼女は左樣して光川氏と相對して居ると、何となく胸の中が溫かに解れて來るやうな氣がして、我と我身體に生濕い血潮の溫みが感じられる。左樣して彼女は溫かい靄の中に包まれて居るやうな氣持に彼の情緒の中に身を浸して居るのであつた。優子の此技術室に坐つて居る一刻々々は甘味な酒の盃の底の乾るのを惜しむやうなものであつた。そして、優子の無意識に浮べる媚を帶びた表情を光川氏はまた、彼女がはつとするやうな強い眼附に見返した。優子は其炎のやうなものがちらと橫ぎる其眼を見て、初めて自分の媚を含んだ態度や表情を意識するのであつた。

最早それは何れに取つても不可抗な暴力であつたのである――

『私、何だか斯う云ふ日の暮方が耐らなく所好で御座いますわ。』優子は淚を含んだやうなしめやかな聲でそんな事を言ひながら、次第に物の輪廓がぼかされて行く薄暮の技術室の中に靜かに眼を伏せて居ることもあつた。

『だけど何だか耐らないな、寂しくつて!』

光川氏は言ひ〳〵立上つて卓子の上の電燈のスヰッチを振つたりした。そんな處へ突然女中を手傳はせて手料理の夕餉の洋食の皿などを運んで來る夫人の姿に愕かされた。(未完)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

越後屋の娘

加藤みどり

一

越後屋の娘は氣狂ひになつたといふ噂が、先づ町の人々の口に上るやうになつた。中にはそれをいゝ氣味だと云ふものもあれば、又娘の身になつて見れば可憐相なものだといふ者もあつた。

『何故町の人達は私が通ると顔ばかり見るのだらう。見るばかりではない。何か囁きあつては人を馬鹿にしたやうな、そして冷こい笑ひを見せて居る。さうです。さうです。私の家は町の人達から爪はじきをされ、交際もされない家です。さうです、さうです。私は旣う二十二になりますけれど未だお嫁に行く處はありません。貰ひ手がないんです。それに私は、私は……吁！病氣です。病氣？病氣は肺なんです。人が最も嫌ふ、だから私は人に嫌はれなければなりません。』

と越後屋の娘絹江は悲しくなると佛壇のある奥の小暗い座敷に打ち臥していつも斯う云つて歔欷くのであつた。其の座敷は店から餘程隔れて居るし、父母の居る明い表座敷からも隔つて居て絹江の泣くには、あつらへむきの場所であつた。其の座敷で、絹江の實母が長い間病むで死むだ。又兄弟の中で一番絹江を愛して居て呉れた一人の兄は、肺病で矢張其の座敷で死んだ。懷しい母と兄の位牌は、晝間でも暗く、蠟燭が小さくトボ〳〵と燭つて居る時代のついた黑い佛壇の中に、並べられてあつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

絹江は其の佛壇をいつも懐しげに涙の眸に見つめるのであつた。そして人知れぬ心の悲しみを訴へるやうにいつまでもいつまでも其の前をはなれなかつた。

絹江の周圍の出來事は、さらでだに神經的になつて居る娘心を無慘にもかき亂した。病的になつて居る女の認識には、世のあらゆる事が非常に誇大されて這入りこむだ。繼母が絹江に對する事から、兄達が妹に對する態度から、世間の人が「越後屋の娘」に對する態度――それが大變絹江を苦しませ脅かした。世間の人は勿論親兄弟からさへ憎まれ、呪はれて居るといふ事が絹江の頭に先入主となつて居る。從つて絹江の心には人の情の入りこむ餘裕が無かつた。親身の親兄弟をさへ呪ふ絹江の神經は非常識に狂ひ始めたのであつた。

越後屋は、此の三百戸ばかりの田舍の小さい一筋町の北部にある呉服屋であつた。新らしく家が建てられては伸びて行く町の南部とは反對に、此の北町はだん〳〵町もさびれて行つた。料理屋とか、小間物屋とか、床屋、藥師屋などゝいふ華かな明い店は一軒もなく、米屋、運送屋、醫者、其の他店を張らないやうな家が陰氣に古ぼい軒を並べて居る。夜も靜まり返つて、人通りも少い。越後屋は、北町に下るだら〳〵坂の中央にあつたが、此の呉服屋は、人の這入り憎いのに有名な店であつた。北町の人達が、買物に越後屋の前まで來ても、何故だかはいりかねて其の店を通りこしてしまう。そして三四丁も南の中町の呉服屋で用を足すべくされてしまう。美しい布を並べた店はかうして空しくさびれて行つた。殊に絹江の父親の時代はそれほどでもなかつたが、絹江の母親が死に間もなく若い後妻が店に坐るやうになつてから、町の人々は越後屋に對していろ〳〵惡口を云ふやうになつた。其の半ば禿げかけた主人の頭と、梅香の薫馥郁として、美しく取りあげた若々しい髷の後妻とは、其の薄

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

暗い店の中ではどうも調和がとれなかつた。それに先妻の男の子供達がもう一人前になつて、店にずらりと並むで居る。店がひまなので自然に道を通る人々の噂をしたり、煙草の烟を吹いたりして居た。絹江のそれ等の兄達は、其の人並はづれて大きな光つた眼を、一日中通る人々にギロリ〱と送つて居た。「越後屋の息子達」は町でも惡い評判を立てゝ居た。どうも彼處の息子逹は性が惡いといふのが人々の評判であつた。殊に町の青年會の連中は、越後屋の兄弟を脫會させてしまつた。何の理由かと云へば、酒飮で喧嘩好きで、ずるくつて、慾深だといふのである。其の兄弟同じやうに持つた冷く光つた眼と、喋舌れば皮肉と、毒々しい惡言とよりほか云はない此の兄弟は、何うしても人々の中に容れられなかつた。

斯ういふ風で、若い息子達も、又「越後屋」其の店も全く町の人々から孤立しなければならなかつた。從つて息子達は愈々人々を白眼視し、個人的になり、ひねくれ曲つて行つた。然し此店には古くからの田舍の客が多かつた。正直な田舍者は、行きつけた店より他には行かないのが常で、頭の禿げた老主人とは馴染であると云ふところから、錢があがつて金子がはいつた時とか、冬の暇の時には、一家の者の着る物や、又娘の嫁入仕度などの買入に出かけて來た。

絹江を一番愛したといふ二番目の兄の冬雄は、兄弟の中でも變り者であつた。幼い頃から學問が好きで、小學校を終へると店番などを嫌つて何でも中學へ行くと云つて、遂々十里も南に隔つた町の中學校に入學した、中學を終へると、一旦家に歸つたもの、面白くなくつて家を飛び出し、五六年日本國中を漂浪して來た。最後に或る江州の地方の新聞社に務めて居たが、そこから病を得て歸宅した。其の時は誰も知らぬ間に、かなり惡い病氣が進むで居た。それと知つて家內の者は非常に驚いた。そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して親をも兄弟をも捨てゝ飛び出したやうな者が、人の厭み嫌ふ病を負ひこむで、家に歸つて來たといふ事を、非常に立腹した。再び旅に追ひやらうと、兄や弟が企てたが、もう、ちつとも動く事が出來ないほど病が革つて居た。

『冬雄があんな病氣になつたので、店が餘計さびれて來た。』と兄の一郎は澁い顏を一層しかめた。『ね。貴郎、困りましたね。冬雄が惡い病氣になつたといふ事が世間に知れたら、絹江の嫁入の邪魔になるでせうから。』と母親も顏を曇らして主人に云つた。此の時、絹江はもう二十歲であつた。田舍で二十歲の娘だと云へば、オールド、ミッスの仲間にされて、嘲笑の的にされた。これを聽く絹江はいつも暗い眼に淚をためて、又佛壇の前へ行つていつまでも泣くのであつた。

絹江は友人は皆人の妻となつたり又は嬉しげに子供を抱いて里に歸つて來るのを見るにつけ自分一人不幸に此の世に生れてゞも來たやうに苦しく悲しかつた。

そして友人が結婚したとか、子供が生れたとかいふ噂でもきくと二日も三日も飯も食べずに佛壇のある座敷に籠つたきり出て來なかつた。けれど家の人々は又例の病氣が出たと云つて慰めてもやらなかつた。

冬雄が家を飛び出して、歸らなかつた長い年月の間、それとなく妹には音信して居た。十七歲の時、絹江が始めて初戀を知つた事も此の兄には心を打ちあけて居た。其の初戀はほんの淡いもので、直きと消えてしまつたが、絹江の若い情熱は愈々燃えて、異性なくては生きられない程、性の衝動を覺えた。絹江は、文學を好む冬雄に矢張訴へずには居られなかつた。年頃になつた絹江の眼には、異性が何麽に戀しくうつつたであらう。然し、絹江に接する男は極く少なかつた。所謂悧巧な男は、決して、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「越後屋の娘」には手も出さなかつた。從つて絹江の心は一層情火に狂つて來た。男が欲しいといふ切實な希望は、空しく月日を消して行つた。友人が人妻になつた事をきく、又、戀物語でもきくと、絹江は、つく〴〵自分一人が此の世の不幸者であると思つた。何故自分には戀人が出來ないのだらう。何故、誰も自分を貰つて呉れないんだらう？と。

絹江は、自分の家が何れだけ、町の人々から憎くみ厭はれて居るかを思ふと、心に寒い戰慄を覺えた。もう自分は一生家の爲めに犧牲にならなければならない。とさう思ふと、自分が此の家に生れた事が呪はしくなる。父も憎い。繼母も憎い。兄も弟も、皆憎い。自分は、幸福にならなければならない。這應家から拔け出て、幸福な世間に出なければならない。相手さへあつたら自分は直ぐにも逃げ出す。といふ心持が處女心を唆つた。

一體絹江の父親は、「どうでもいゝ」といふ性分の人であつたので、別に娘の爲めにやきもきする事もなかつた。何となく日さへ無事で暮れたらよい人であつた。けれど女だけに、殊に義理ある仲といふので、世間の思はくもあると云つて、繼母は頻りに絹江の嫁入先の事で頭をいためた。けれど、絹江には、繼母の心づくしは決して有難くなかつた。自分を一日も早く追ひ出し度いのだ。と云ふ心持があつた。

十九の春、絹江は二度目の戀をした。相手といふは、旅廻りの商人で、未だ二十五といふ若い男であつた。身體は小さくしまつて居て、角帶に、縞の前掛といふ姿が、其のはしつこさうな身體に似ついて居た。毎年、春になると京都の方から此の國にはいつて來て、品物を交換して行く。絹江はもう四五年前から此の男を知つて居た。最初は、他の男に連れられて來て居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何ういふ手段で接近したのか、兎に角、絹江は其の中高の色白の顔にすつかり若い血をどよませてしまつた。

町の北の端、村堺には、若葉川が波音高く流れて居て、其處に村の公園があつた。絹江は、櫻の花のチラ／＼と散る芝原の上で、夜更くる迄男と語つた。其の夜深い蒼さを湛へた空には、滿足さうに星が瞬いて居たであらうか。それとも、月が霞の間から耻しさうに櫻の花を透かして二人を眺めて居たであらうか？。

櫻は毎年咲き、芝草は毎年綠艶やかに萌え出るが、絹江の戀は一年で枯れてしまつた。

「男つて無情なものだ」といふ考へが深く絹江の心に刻み入つた。

其の頃冬雄は歌など書きこむでセンチメンタルな手紙を絹江に送り／＼した。どうかすると小說めいた長いものをも書いて送つてよこす事もあつた。

絹江は一體幼い頃から小說を讀む事が好きであつた。少女小說から育まれた絹江の戀情は、戀愛小說に走るやうになつて、一層空想的に傾いて行つた。

冬雄が病氣で歸つて來ると、絹江は出來るだけ看病した。兄が血を吐く度に何とも云へない恐怖に襲はれながらも、情熱を兄一人に注ぎ込むだほど、一生懸命に世話をした。そのうちに少し氣分もよくなつたので、熱海に轉地療養する爲めに絹江が附き添つて半年ばかり、其處で暮したが絹江にとつては今迄にないのんびりとした生活をしたのであつた。

絹江が兄を思ふ情は、全く兄妹以上であつた。絹江は情熱を注ぐべき相手が無くつては居られない女であつた。其の相手のない時は絹江の振舞はちと常識を逸して居た。眼はいつもチロ／＼と落つき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がなく動いて、する事なす事、皆人の意想外に出た。だから、時とすると、氣がふれたのだと思はれる事も折々あつた。

愛する兄が、再び冷い家庭に歸つて來て、永久に死の手に歸した時、其の時から絹江の心が狂つたと云へば云へる。

絹江は兄の死に依つて、先づ病氣の怖ろしいといふ事を知つた。次に病氣にともなつて當然に來るべき死といふものを心から恐れ出した。殊に愛して居た、戀の的になつて居た兄が死んだといふ事は、絹江の精神に非常な反動を起さずには居られなかつた。

『お前は、兄さんの看病するもいゝが、兄さんの病氣がうつるぞ。』と兄達から云はれた事が何ものよりか強い恐怖をおこさせる暗示となつた。而して知らず〳〵其の恐怖が絹江の身體を蝕み精神を亂して行くのであつた。

二

絹江は蒼い顏をして外から歸つて來た。裏口へ曲らうと思つたが、店に客も見えなく、それに非常に疲れて居たので、二人の兄と下の弟が火鉢を圍むで居る前を通つて、店の隅の方から上らうとした。すると三人の兄弟はお互に顏を見合せてクス〳〵と笑つた。いつもなら突かゝつて行く絹江も、口を利く事も面倒な位だつたので、其のまゝ上つてしまつた。

『おい其の風采は何うだ。狂人だと云はれるも無理はないよ。』と一番の兄は嘲つた。今朝早く起きあがつて、髮をとかしあげ、化粧までして出たのが、歸つて來た樣子と云つたら、白粉はすつかり剝げて、耳の根と、丸い鼻の側の窪と、額の眞中に斑に殘つて居る。束髮は殆どくずれて、長いピンが拔けか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゝつて居る。銘仙の袷の前がはたかつて、赤い長襦袢が歩く度に塵だらけの白足袋の上に亂れて居る。殊に、亂れ髮を振りかけた顏は、人間とは思へない位に蒼ざめて居る。

『見合ひに行つたのだらう。御氣に召したかね。』

けれど絹江は何とも云はずに、すつと奥へ行つてしまつた。其の釣り上つた眼ぢりに、涙が溜つて居た。

絹江は、矢張失望して歸つて來たのであつた。母からの話で、自分から進むで先方の云ふなりに、見合ひにと一人で出かけて行つた。今日本人が行くと云ふ約束は三日前に整つて居たのであるが、何うした筈か、落ち合ふ筈の或る家には、婿さんといふ人は來なくつて緣談の口を利いた先方の親戚の男が一人待つて居た。

絹江は、そこでも聽き度くもない事を並べられた。つまり、年まわりが惡いとか、合性が惡いとか云ふ事を以て理由としてことわられたのであつた。

『つまり何でせう、貴君の仰しやることは、私の家が評判が惡いといふ事、兄が肺病で死んだと云ふこと、そして私が世間から氣が狂つたと云はれて居る事、それが理由なんでせう。いゝえ、辯解は御無用です。分つて居ます。何にしろ、貴君方は、私を最初から弄ぼうとなすつたのです。いゝえ、いゝえ、さうですよ。さうでないとは云はせません。それなら何故、此處まで私を呼びよせたんです。貴君方は、私を苦しめ恥しめやうと、ようも、ようも、なさいましたね。覺えていらつしやい。エヽ。私から、きつぱりとおことわり致します。先方へはよろしく云つて下さい。私は……私は……口惜しい………』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

取りのぼせた絹江は、相手の男に摑みもかゝらんばかりに狂ひ泣いた。絹江は、もう幾度も、幾度も、いろ〳〵な男と見合ひをした。が其の半分は其の場で喧嘩をして別れたのであつた。これ程までにされてゝ、絹江は尚ほ人妻になり度かつた。男の愛を欲しかつた。

『あのね。ハヽヽ、私は兄の病氣が移つたんですよ。』と感傷的に氣味惡く笑つて、ゴホン〳〵と咳をした。

『私はね、』と云つて、笑つた後からもう、ホロ〳〵涙をこぼして、『あゝ口惜しい、私は斯うして人達から嬲者にされ、馬鹿にされなくつちやあならない。私は……私……口惜しい。』と泣き入つたと思ふと、カバと起き上つて、其の男が手の出しやうなく、茫然して居る顏にパッと痰を吐きかけた。

『私の痰には黴菌があるんですよハヽヽ』

笑つたと思ふと、フラ〳〵と其の家を飛び出してしまつた。そして夢中で家へ歸つて來たのであつた。

絹江は、精神上の煩悶と、不養生の爲めに胃病が慢性になつてしまつた上に、秋風が立ちそめた頃から風邪の氣味で氣管を惡るくしてしまつた。其の爲めに、食はすゝまず、頭痛がする。咳が出るといふわけで、絹江自身では、全く大病人のやうな氣がして、家に居ると、ウン〳〵呻つて居る。けれど、何か氣に向く事があると、呻つて居た病人が、非常な元氣で外を飛び廻るのであつた。

『ウム。愈々絹の奴は眞ものになつたな。そら見ろ、兄さんの病氣がとりついてしまつた。おゝ。怖い〳〵』と兄達が絹江の枕許に來ては、斯歷事を喋舌り散らして逃げて行つてしまう。誰も苦しくともみとりして呉れる者もないので、絹江は、家の者を皆呪つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『私が肺病になつたものだから、一日も早く死ねがしと祈つて居るのだ。あゝ、口惜しい。』と蒲團にしがみついて狂ひ泣く。それを見るに見かねて、父親がやさしくしてやらうとすると、繼母がしぶい顏をするので、父親も、苦悶して居る娘の枕許から去つてしまう。實母が死に、兄の死んだ、佛壇のある暗い座敷の、絹江は、斯うして氣が狂つて行くのであつた。（未完）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

温度表

本郷京子

病院の待合室に小半時銀杏のちるをみてありしかな

發作などあれば一しほかなしみのいやますわれをなぐさむる君

夜もすがらひた泣きぬれし眼にしみる朝のあかるき瞼のおもみ

尼となりて世をはかなみて終るにはあまりにあつきわが心かも

かなしみも悶えも君がみえまひに忘るゝわれとなりにしものを

わがのぞみ君につげむと筆とれば筆とれば頰に茜さすかな

鶏頭の赤きがわれのたゞれたる心にしみてかなしき日かな

大久保のすまゐもいつかおもひでの數にいるらむその日なつかし

白ばらの花を贈りて

白ばらの香をしかぎなばいつの日も君とかたりし日をしのばなむ

何事もなし得ずなりて七年を薬にしみてすぎしわれかな

鏡みるは悲しきことに思ふかな臨終の兄の顔のみゆれば

みだれたる髪ときあぐる手先にはつげの小櫛も病めば重たし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

病みてある日

秀輌音

雪もよひいつか薄日も消えぬがに一しほ寒さ身に迫りきぬ

夜をこめて板戸打ちけりさら／＼と雪かみぞれかあられか雨か

ほろ／＼と南天の實の散りしけば夕の鐘の音はもしのばゆ

現身の運命はかなし共々に死なまじものと誓い來つれど

君おきて一人さびしく土くれに歸るといふも深きさだめか

比最後望みあらねば悔もなし、ひた悲しきは一人行く事

これやこの現身なれば死なむ日も運命とおもひ知れどたゆたふ

ぬかづきて神をおろがむ思ひとも病みてすぐなる心くらべぬ

かい卷の友禪模樣華やかに病める我心慰めてけり

ひいやりと吾に歸り來ぬわが涙、身じろきならず病み續くれば

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

隠れた女

生田花世

　その女がふつと隠れてしまつてからもう四年といふ長い月日が少しのよどみも無く流れて、春の花や、秋の木の葉とともに、その女が方々にのこしてあつた印象や事業や不義理や善事や逸話や又は評判を後方もなくどこかへ運んで行つて了つた。そして今はもう誰もその女の事を考へたり思ひ出したりしない。よくよく其女の事が出なければならぬ昔話にでもなると、僅かにその女の姓名があげられて、

『あの人の遣り方は本當に拙かつたんですもの。あれぢや失敗するのは當り前ですわ』

と云ふ位に止まつて了ふ。

　私は私をはじめ人間が盡く、平等に死といふ事實で、——それは個體の死をも含み生物全體宇宙全體の死をも含む——生れない時と同じやうになるといふ事を思はせられる。その女に對する忘却も亦同じ事なのである。

　嘗てその女は黑つぽいお召の仕事着兼用といつてもよい道行コートを着て、空氣草履を穿いて、その片方の手には革製の丈夫な女持の事務鞄を下げて、肩幅の廣いがつしりとした、白味のかつた切り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上つた鋭い眼で、どんな人にでも洒落と氣焔と恩惠とを振り卷いてぐつと凄い一瞥をくれて、決して弱々しい女の音を吐かないで高笑ひをした。

その女は貴夫人をいつでも的にして矢を放つた。そして矢ははづれなかつたと云つてもよい。世間知らずな、否それよりも尊敬や追從に倦いてゐる貴夫人等は、その女に、

『そんな馬鹿な事があるもんですか』

とか、

『貴女、それはかうですよ』

とか磊落に然かも謙遜を拔きにした言葉で立入つたことでも云はれゐと、非常にそれが淸新に尊貴に感ぜられて、豫言者にでも逢つたやうにその女に興味と信用とを惜しまないのであつた。

周圍の大抵の人はその女にいろ〳〵の便宜――それは勿論女に限つて誰でもが持つてゐる秘密な融通である――を與へられたし、同時にそれに等しいだけの利用をその女にされたものである。

その女はどう〳〵事業が蹉跌して了つて、二千圓といふ借財を被つて、どうする事も出來なくなつて了つた。それといふのは、その女は苦肉の策には長じてゐたが、それは徒に大きく廣く四方八方に搔き散らかすだけであつて後の始末、事業に大切な細心な打算に暗かつたからである。

私は暫くその女に逢はないでゐた。ところが思ひがけない時に一枚の葉書が來た。それはいつもの通り簡單なもので、明日午後一時ごろ一寸Hさんの家まで來て下さい。少し賴みたい事があるといふ文面であつた。

今考へるとそれはもう葉櫻の時分であつた。Hさんの家へ行く道なので神樂坂を見附の方に眞直に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

降りてゆくと、あの停車場口の櫻の並木が青天鵞絨のやうに厚く繁つて光つてゐたし陸橋の傍には眞紅に躑躅が咲いてゐた。

Ｈさんの家の八疊に入ると二三人の女に圍まれてその女は例の黒いお召の道行コートを解いて鋏で伸ばして、裏を取つて單に縫ひ直してゐたのだつた。私を見るとその白味の多い凄い切り上つた眼でぐつと見て――それは唯見るのではあつたが慣れなければ睨まれたと思ふに相違ない――云つた。

『わざ〳〵來て頂いて濟まなかつたわね。一寸私が行かれないとこへ行つて來てほしいのよ』

といつて例の女持の事務鞄の中から一通の手紙を出して、

『茅場町の乘換へで降りて少し行つて角から左に入つて二三町行つたところの黒煉瓦の家なのよ、お金を渡してくれるから受取つて來て頂戴な』

そして、蟇口から二十錢銀貨を一つ撮んで電車賃にと云つて私の手に渡した。

私は其頃その女のさういふ走り遣ひに折々頼まれたし、またそれだけの世話もされてゐた。

茅場町のその黒煉瓦の家はすぐ分つた。質屋とも銀行ともつかない陰氣な薄氣味の惡い家だつた。奥深く入つていつて、倉庫風の事務室の小さい口から手紙をわたすと、それを受取つた金庫に近い固い頭や手をした老人が

『岸さんですな。さうですね』

と繰返した。手紙の差出人はその女ではなくて、岸といふある女學校の敎師の名であつたからだ。

『さうでございます』

と私はその時の暗い怪しいしかし遁れがたい心持で云つて頷いた。老人は金庫の方に行つて、三枚

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の十圓紙幣を出して來て、私の前に置いた。私がその金を手にした時の心持は今も單に屈辱に近いとしか思ひ出せないやうな異樣なものだつた。私は怯かされたやうな不安な心持となり、あわてて其の黑い家を出た。

H さんの家に歸ると、その女はもう仕立てた道行を着て白粉を直して待つてゐた。三十圓の紙幣はその乳のあたりに收められた。

『何處へ出掛けるの』

『急な用事でね。これから京都へ行くの、そして事によつたら九州の方へ行くかも知れないの』

その女は猛々しい顏付に氣負つたやうに笑を湛へて立上つた。

私達は玄關でそれを見送つた。

その女を乘せた俥は初夏の埃を輕く上げて忽ち町角に隱れてしまつた。

それから四年になる。一人もその女を見たといふ人はない。けれども死んだといふ人もない。否、東京に隱れて住んでゐるといふ人の方が多い位である。私も亦さう思つてゐる。

太陽は彼女を照らしてゐるであらう。その女が今どんな裏長屋にゐても、また大きい邸の奧にゐても。私は空想で、その女の此頃の生活を描いてゐるが、太陽の方がもつとよく知つてるに相違ない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

メスの光に悸えつつ

今井稠子

白楊ヶ丘の高臺に青空高く、全市を俯瞰してゐる病院のクロックタワーから鳴り出した緩やかな旋律は、恰度澄み亘つた池の面に石を投げ込んだ時の波紋の樣に、擴がつては、行衞知れず朝霧の中に消え去つた。

淡い寐覺めの夢の裡にONE•TWO•THREE•FOURと幽かに知覺せしめたヒステリックな、銳い私の末梢神經の顫動に、顏面の細胞が幾度かピリッとすると、私は、はつと目覺めて明らかな全意識に呼吸吐く私を眞白いベッドの上に見出した。タングステンの二十燭光は疲勞と倦怠とに俯向いてゐるかの樣に、過渡時の雰圍氣の漂ふ病室に淡い光を洩らしてゐた。私が目を醒ましたのに氣付いた看護婦のS子さんは、劃られた別室の扉を排いて嫣然した顏を現した。

『お目覺めですの?! 氷嚢換えませう?』

『ええ、そうして頂戴、貴女も早くお目醒めですこと』

『ほほ、私今時計の響に………』

『さう……』此女も神經過敏かしらと思ひながら『窓の外は大層やかましいぢやないの? 誰れで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せう？』

『感化院の小供ですの』窓の方へ歩み寄つたS子は、帷布を掃つて戸をサラ〳〵と繰り上げながら云つた。

草苅れり感化院兒等一心にかくて明け行く病院の朝はも。

夢破る朝の目醒めの噪音は感化院兒の無智のさざめき。

昨晩遲くまで草の上にハーモニカを鳴らしながら、螢を趁つたり海月を讃美したせいか、ズキン〳〵と鼻が疾んで輕い眩暈をさへ感じたが、まだ見た事のない私は感化院の小供！と云ふ一語に溢れる好奇心に嗾られて、襟搔き合せながらS子さんと窓邊に頬を並べた。三十人許りの院兒等の一群れは、恰度窓下の處で日本海を背景に雀の樣に喋りながら、夜露に濡れた雜草を苅つてゐた。可愛そうな之等の少年にどうして罪惡の芽が萌したのだらうと、可憐に思ふ情が冉々と迫つて、言ひ知れないあぢきなさを感ずるのであつた。

眸を上げると、東の空に、國境の連山の輪廓を明らかに畫く曙の第一閃――其餘光は溢れて、嗾い〳〵稻の香馨る越後平野に流れ、そして前面の日本海の波打際に閃めいてゐる。見下す丘の下の市街は、淡いミルク色の朝霧に蔽はれて、其隙間からちらほら見える數知れない間拔けた電燈の光は、恰度ヴエールに織り込まれた黃金の珠か、それとも絽の螢籠かと思はれた。又、輕雲の漾ふ星月夜の光景が、湖面に映る樣を崖の上て讃美してゐるかの樣な心地にもなるのであつた。近く鐵道線路を隔てゝ汪洋と流れる信濃川は、晝夜を分かずに默々と海へ注いでゐる。靑い灯の岸邊の柳は魔女の樣な誘惑と沈默とに俯向いてゐる。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人寰の外に築かれた此一廓――綠の夢にまどろむ緘默な病院の夜は、白金の靄の松の梢に煙つて、廣い庭のテニスコートの白いラインに驚いて次第〳〵に明けて行く………。

『苜蓿は苅るんぢやないよ』髯の赭い露西亞の農人のスタイル其儘の監督らしい人が、首を擡げて大きな聲で云つた。そして『靜かに！』と附け加へると、鳴く蟲の草叢を鞭つた樣に、小供等のさざめきは歇んだ。………がそれも束の間であつた。鼻の疼みが一層激しいので、洗面した後再び私はベッドの上に橫たはつた。

S子さんの氷を摧く單調なもの寂しい響がこつ〳〵と、あたりの人々の平穩な曉の夢に調べを添へてゐた。氷嚢を取り換へて枕邊の安樂椅子に靠つたS子さんは慵さうに雜誌の拾ひ讀みをしてゐるらしかつた。苛々した神經質な二人の女！　私は次の別室にまだ眠つてゐる乳母の爽ばりした慈しみの顏に早く接したいと希つた。私も慵い。手術後の疲勞と體溫の昇つてゐる爲もあらうが、何んとなく血液の循環が倦怠を帶びて、今にも心臟が破裂しさうな心地がして、話もしたくない程血弛いので、瞑つと眼を閉じて脈搏を數え始めた。

『私の心臟は動いてゐる。S子さんの心臟も動いてゐる。此皷動の止まつた時は、共に黑い死の手に擁せられなければならない。私の心臟は二十年間の斷えざる勞働――機械的な單調さに堪えて來た程勤勉だ。しかもタイムは水の樣に流れる。生命！　勿論未知數であるが、此生命の上に自己の進路を開拓しつつもつと强く、强い意義ある生の感激に、淸々しい血の流のリズムを高唱しなければならない。』と思つた私は、そつと眼を開いた。と、瞑つと雜誌越に私を見詰めながら、呆んやり考へ込んでゐたS子さんの眼と逢つた刹那、S子さんは發作的に潤んだ瞳をそむけた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

S子さんは、廿三歳の清楚なカンナの花の樣な曲線美の女であつて、殊更ら目立つ其美しい、黑髮に秘められた半生の謎は、生活に困憊した運命の悲哀となつて、眞白い膚を透して額に俯ひ上る、蚯蚓の樣な青筋の蠢動に其影を漂はしてゐる。乳母の慫慂する儘話した先きの日のS子さんの物語に依ると、鑛山事業の狂ひと相場の失敗とは相踵いで逆境に導き陷れ、復た立つに由ない悲慘の涙に桃色の夢、綠の夢、淡むらさきの夢、色とり／＼の夢は消えて、S子さんも白衣に竭きせぬ涙を灑ぐ日のみ多い省護の身となつたのであつた。彼女は今、一家を支へる纔かな俸給の爲に、トボ／＼と出勤する可憐な父樣の後姿を見送りながら、嬰子を抱き緊めて寂しい故郷の我家の玄關に佇んで、つくねんとありし日を偲ぶ母樣の姿を思ひ浮べたのであらう。

『御廻診で御座いますよ』『お姉樣』と搖すぶるSさんと乳母の聲に目醒めると、ベッドの周りは白衣の人々に圍まれてゐた。科長のK博士は、型の通り診察を終へるとS子さんに一言二言囁いて、聽診器を片手に三人の醫員と五六人の看護婦を從へて靜かにドアの外に消えた。暖かな軟らかい午前八時の陽光は、綠濃やかな窓邊のアカシヤの葉末に渦卷き歔欷いて、隙漏る紅い光は華奢な草色緞子の窓掛を透して、微風の搖らぎに瞬いてゐた。

隔日毎に博士の廻診を仰ぐ特等室の權威――其裏には脈管を流れる貴い血潮の樣に、黃金が煌めきながら社會的に躍動してゐるからであると思ひ到ると、私は双手に眼を蔽ふて金の光りに今更ら戰慄せずにゐられなかつた。そして理解も同情も私から遠ざかつた異母の、姉の手紙の一節が思ひ出されて泌み／＼悲しさを感ずるのであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『……　……御手紙に依れば仲々の重患と察せられ候に就いては隨分御大切に、殊に呼吸器の故障は根治せざれば後日の憂ひあるとの由聞き及び居り候まゝ、此際再發の恐れなき樣充分御治療の上、一日も早く御退院の程希望に堪えず候…………』

自筆の此端書が、眞情から出た通り一遍の、型に嵌つた御世辭と看過せばそれまでゞあるが、私から進んで理解と歡喜とを以つて喜悅の涙を潤さうと思つても、强ひても其樣に思惟する事の出來ない程姉に虐げられてゐる私は、寧ろ『鼻の治療に許り怎麼に澤山金を費つて什うするんです、去年も今年も…………。それに一等でよからうと云ふのに矢張り特等になんてして。今度と云ふ今度こそは、極く儉約して是非根治する樣になさい』と暗に意味するのであるまいかと思ふと、反抗の態度が渦捲いて『再發の懼れなき樣充分治療せよ』と親切めいた事を云つてゐながら『一日も早く退院の程希望に堪えず』とは何事だらう？　充分の治療には充分な金と時が要る。一日も早く私のにこやかな顏が見たいとか、窮屈な病院生活は苦痛だらうとか云ふ意味ならまだしも、怎麼同情心の姉にあらう筈がない事は明らかだと心に肯くと、一層冷笑が溢れて姉の心裡を悲ますにゐられなかつた。

世の中に巴渦を卷いて溺滿してゐる錯雜なあらゆる問題の經緯——其源泉を辿つて見るならば、それは皆黃金の二字に盡されてゐる。物質を背景として形成された社會に息吐く以上は、勿論全く之を無視して生きる事は出來ない。けれども餘りにあからさまな、そして貪慾な無智に近い人々のみ多い憂世が傪まれた。之も生存競爭上、必然に起るべき現象であらうが、利害關係の爲には美しい人生の花とも云ふべき理解も同情も絆れるとは、全く私をして事實の前に悲歌し嗟歎せしめて止まない。打算功利に齷齪する以上理解乃至同化は永遠に覓むべくもない。想ひ玆に到ると眞實に私は、生きんと

する力の偉大さに恐怖し戰慄せずにゐられない。
母親の愛兒に於ける情け！ それは誠に美しいものであつて天地間の何物を以つてするも……絶對的のものである。これこそ眞實の理解であつて、自らを犠牲にしてまでもと盲目的な愛をする慈母の心裡は、寔に尊く崇高である。末子として殊に深い此愛に浴してゐた私が、一度物質關係を超越した此愛ある兩親の慈しみの膝元を離れて人妻の位置に立つと、今迄平穩であつた外界の總ては、一時に假面を脱して私に肉薄するかの樣に思はれる。純な私の紅の心を攪亂する醜惡な人生の一面が、何の飾りもなく赤裸々に披瀝せられたのである。私の今迄掛けてゐた貴い愛の眼鏡は、浮世の風に乘じて横行する妖魔に敢なくも盜まれたのであつた。此渦中に投せられた私に對する兩親の愛が直接に或は間接に實現する毎に、幼い妹と云ふ單な事實の前の姉の平面的な淺薄の愛は、次第〳〵に剝脫して『何んだ繼母の子が』と蔑視する目付きは『父樣までが』と云ふつまらない嫉妬心を伴つて、剩へ、はしたない無智な姑根性を加味して其言語擧動の端々に閃めくのである。婚約の成立した際に姉は何と言つたであらう!?
『何んと云つても姉妹だもの面倒な事なんてないわ』
そして周圍の人々は何んと評したであらう。
『姉樣と同じ家に嫁きなさるんだもの仕合せです』之等は皆、名實伴はない物品を包んだ表面の綾羅の彩りに讃美する樣な、悲しい皮想の觀にしか過ぎなかつた。
『來年の三月になれば、今迄振り馴れた釆配を異腹の妹に渡して、木曾屋の大宗家を去らなければならない。如何に姉は姉でも、分家となれば自然肩身が狹くなる。此家でお正月するのも後一度きりだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

姉と生れながら軈ては妹の爲に被征服者の位置にあらねばならない――と云ふ觀念が、隨分姉の頭を支配してゐて、私に對する羨望から來る妬情と憎惡心が募つて辛らく當るのであつた。そして私は又、姉に『妹の癖に、嫁入りする際の仕度を見れ。私の來る時の幾倍だか知れないぢやないか。これが兩親の愛に、より强く薫つてゐたと云ふ證據だ。其罪として少しは辛らい目に遇はして呉れる――と云ふ樣な心地が漲つてゐるのに氣がついた。成程十七歲で嫁いで今年十五になる娘がある程の遠い時代に嫁入つたのであるから、今の私の衣裳調度との差異あるは勿論の事であらねばならない。時の推移と變遷と、これが伴ふ四圍の狀況――これを念頭に置かないで徒らに嫉視するは、一個の人格者として餘りに低級であるまいかと心中憫笑し反目せずにゐられなかつた。それも二十五六の頃まで、年々流行の衣服を實家に要求しなかつた姉樣ならまだしも………。それに此頃は、後見者の妻として日々の賣上金を取扱つてゐるのであるから、内密に何なりと自由に大膽に後日の計をめぐらす貪欲心には全く呆れざるを得ない。

私も嫁いだ當時は、世間知らずのうら若い私が二三年の後には、一家の主婦として所理しなければならないと云ふ、責任を感ずる事によつて湧き上る悲哀と寂寥とがあつた。幾多周圍の傭人は渝らないとしても、八十歲の老祖父と私等夫婦との唯三人になるのかと思ふと、姉夫婦や六人の小供を加へた今の賑やかさを末長くと希つたが、一年を經た今日は寧ろ、早く型に嵌つた黴臭い不徹底な生き甲斐ない樣な放恣放濫の生活が去つて、若い主婦として勇敢に充實せる生の創造に向つて旗幟を擧げる、北三月が待たれてならない。唯今の處、一家の實權は勿論良人の父（日清之役に死）の弟であり且つ後見人であるK叔父樣（姉の良人）にあるのであつて、分家するにしても破格の厚意に浴すると云ふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事と、七人姉弟の末の弟の妻として來た姉が、主婦の役を承つてゐる態度が餘り圖に乘り過ぎると云ふ事とが、叔父の姉達(良人の伯母)の快しとしない點である。殊に一寸遊びに被入つても、相續人でもない者の小供達までが大元氣で實家の空氣に浴しつゝ健やかに、育つて行く無邪氣な中にも勝利者の樣な節々が閃めくと、姉の跋扈の間接な反映として表れるものとしか思はれないし、又小供達が年と共に殖えて來ると、何んとなくそれが他から來た姉の勢力範圍の樣な感がして、心寂しさに顔面の底を流れる、血潮の波動にゆらめく伯母達の有樣が頷かれる。勢力範圍！ 之は世間一般到る處に認める事實である。……お互ではあるが……。私が、私の實家を訪ふても矢張り此萠があるらしく未來が思はれて嫌厭の情が漂つて來る。兒は母體から產れるものであると云ふ絶對的眞理を把握し確認してゐる以上、何んとなく母が兒に於ける關係と父が兒に於けるそれとは、直接と間接との樣に考へられるからである。此事實の上から、此意味に依つて私は、家督を相續すべき者は女たるべき事と、法律の條項を改むるの日あるを冀つて止まない。即ち娘に婿を迎えるを以つて本義とするが家庭——社會改善策の第一歩と思惟するのである。

私は又、姉樣の他日を意味する、四周の人々に對する懷柔策の一端として物質を擲つた、あまりなのを怨まずにゐられなくなつた。そして『自分の財產ぢやないんだから』と無責任に近い分子の、寄生蟲の樣に蠢く利己主義な姉達が、一日居れば一日の損失が蠶食的に私の心を壓迫するかの樣に思ふ程、私は物質的な、そして對社會的な人間となつたのである。又姉樣に呼應する人々——お世辭滿々鼻息を窺ふ的に姉樣の歡心を買ふべく、身を虐げさいなみつつも、それと自慢もし得ずに唯目前の利慾に喜悅の涙を流し低頭してゐる人々のみ多い周圍が淺間しく思はれる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

私は――然し、徒らに反抗の態度を弄するは却つて時代の犠牲者たらねばならない事も自覺してゐる私は、恰度缺員を生じた一人の下女の後を承けて、專念に、メリンスの襷甲斐〳〵しく他の二人の下女と、朝夕體的勞働を共にしてゐる。入院前も、茶の若芽も桑の綠葉も倶に摘んだ。入陽が赤々と綠濃やかな桑園に反照するとき、ふと桑摘む手を止めて指を翳すと、ズキン〳〵と淡い疼みを覺えた私は、轉がつてゐる箒も掛けた事のない程であつた過去の私を想つて、泌み泌みと何事も貴い敎訓であり經驗であると感を深うするのであつた。然しX光線を窺いた時の樣に、額に翳した諸手の指先きが紅に、爽やかな音律を囁かせながら、まともに照らす暖かい陽光の眩ゆさを透して網膜に投影する有樣は、何んと云ふ藝術的な美觀であらう。全身の血液――生命は指先きに煌めく二つのリング――金環のトンネルを潜り潜つて止まない。私は生の歡喜とそよ風嬲る額髮の快さとに獨り微笑まずにゐられなかつた。

　私が嫁いで十日許り後の日の事である。私が『洗濯物があつたら序の時に竹次(樽拾ひ)に持たせてお寄越しよ』と云ふ母樣の仰有つた通り風呂敷に包むと、『稠ちやん、それ位の物は自分で洗濯しなければなりませんよ。今迄の樣に奢り漬つてゐられないわ』姉樣は恁ふ仰有るのであつた。これが、母の懷に抱かれて、何等の動搖も感ぜずに複雜な生の波紋に遊弋してゐた私が、突如として起つた過渡的な著しい變革波動に、悲しみ多さを知つて萎れた首途の感激であつた。

　姉の娘のMちやんがN市の女學校へ入學の際も、『稠ちやんなんて贅澤で、金なんてそこいらから湧くと思つてるんだわ。だから彼麼に澤山費つたのよ。今度M子なんて稠ちやんの半分位で充分だと思ふの、殊に一年生だもの………。極めた金額より十錢でも多く決して送らないわ』と立派な事を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

云つて置きながら、學期末に來た決算書はどうだらう。歐洲戰亂の影響としての物價騰貴上、豫算超過は當然であるが私よりも、より以上だから呆れずにゐられない。要するに怎麼事實は什うでもいゝとして、理想と現實——倫理の一頁にも目を曝した事のない人が、たとひそれが姉であるにせよ、金が湧くと思つてゐるとか贅澤だからとかと侮蔑的な眸を向けるとは、餘りと云へば餘りであるまいかと、金に使役せられる被征服者のみ多い周圍を嘆くのである。私共は、金を屈伏せしめつゝ或意味に於て使はなければならない。搔き集めて守り樂しむ爲の金でなくて、活して費ふ爲の金であると云ふ事を自覺しなければならない。

深遠と淺薄、沈默と饒舌——私は熟々感銘するのであつた。茲に一帶の淺い流水があるとする。其岸に立つて默想するならば、水のせせらぎはあたりの寂寞を破り、流れ來る石油罐にすら物珍らしそうにガランガランと音あらしめる。たとひ川幅が廣いにせよ、それは見掛け倒しであるから敢て涉るも恐れるに足らない。私として或は潛越かも知れないが、饒舌の傾きある姉が今少し、底力ある立體的な、理智ある人となれないか知らと悲まずにゐられない。姉の饒舌が蔭言に溢れる每に、人一倍蔭言を怖れる私は、肉を殺がれるよりも悲しいのである。良人が少し頭痛がすると云つて一日でも寢室を出ない樣な事があらうものなら『何あに寢なくとも濟むんだらうに』とすげなく被有るから、私も私の健康狀態に少しの變調が來ても、事もなげに裝ひながら決してベツドに橫たはつた事のない程、私の心は緊張してゐるのである。

私は又、酒造家と云ふ營業柄、出入する雜多な人々の眼が、嫁！　とフオーカスに蒐る光線の樣に、私に注がれると皆一樣に、高潮した性的本能に燃えてゐる樣に思はれる淺間しさ、次第〳〵に型に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嵌りつつあると云ふ事實の前に戰慄するのであつた。それと同時に黴臭さに遁れんとする私共に對する親族の網が、既に幾重にも前路を阻んでゐるのに氣がついた。凡庸な話柄應答を以つて社交的の最上と心得る形式的鐵槌を以つて型に打ち込まるゝの悲しさよ。代々傳はる財産名望を永遠に保證する爲に行くべき路に誤りなく其一後繼者の妻として子を産み、子に讓つて死んで行く莫迦莫迦しさよと、何等拘束する處のない不覇な自由の翼に時として憧れる私共は、幾株か欝蒼として碧空を蔽ふ欅の梢を仰ぎ樹蔭に佇んで、祖先の靈感に打たれては身あるを知るのであつた。それは恰度ベッドの上に、此樣に活社會の負傷者としての私が今、血流の沈滯に慵さを感じて淸々しい音樂的な生の進行曲に甦り頌歌しやうとする樣で、詰らないと思ふ心に對する祖先のインスピレーションは、心臟の倦怠に向つて全身の血液が革命の反旗を飜して立つたと同日の論であらうと思ひ到つた私は、かくしてこそ始めて、新たな自己の進路を開拓しつゝ覓むる向上發展改善の黎明に逢着の悅びを漂はせ、双手を擧げて北海の巖頭にオーロラの彩光に浴し得るのであると信ずるのであつた。一條の起伏ない平穩な灰色の道を、非藝術の裡に不徹底な現實を繰り返しながら何時まで歩いてゐても、つまらない。今はもう、何事も貴い教訓經驗として私の生活に反響あれ變化あれと希つて止まない。私は此單調な響を破つて新たな進路を開くべく、眞理の山に振り上げる斧の努力の崇嚴さに、希望の襷を緋けずにゐられない。

形式を打破する覺醒のハンマーは直ちに開拓の斧でなければならない。開拓！此一語に溢れる感激は、若き主婦として立つゝある日の個性に芽含みに、燦として耀く希望の光を注ぎ育んで止まない。

先頃の婦人會が××倶樂部に開かれた際も、心合ふ方々と立つてテニスや球撞きに疲憊した身を自ら啣つと『何時までも學校にゐる樣な心地でゐてはならんよ。殊に球撞きなんて棒も持つた事のない、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女の癖に生意氣だよ、輿に乘り過ぎて………。氣を付けろ、嫁ぢやないか』嘲笑の眼を瞠るは何んと云ふ損な生き方をする、距離ある人々の口吻であらう。沕き上る自己の享樂地に立つて讃美し高唱すべく思潮の流轉に疎い凡庸なサークルに沒頭してゐる無神經な是等周圍の人々が憐れみ悲しまれる…………――。

機關車の應笛が、折から、丘をめぐつた彼方の停車場から幽かに聞えて、今し進行に移つた列車は勢よく丘に沿ふてレールの上を滑り去つた。そよ風に搖らめくアカシヤの葉の囁きを潜つて窓掛の襞に瞬いてゐる陽光――私の怖れる此直射光線は、窓掛を掃つたなら、サツト無遠慮に赤く眞面に床の上に反照するであらう。私は、コロロホルムの香漂ふ白いカーテンに閉ざされた手術室に、隙洩る眞晝の赫とした强烈な一閃が、細く射し込み注がれて、硏ぎ澄した銀色の半白刀にギラリと反映した刹那の恐怖を思ひ浮べて身顫ひせずにゐられなかつた。それは數日前の事である。輸送車に仰臥した私が、長い廊下を白いスカアト曳く二人の看護婦さんに送られて、身を手術臺上に載せた時の事で、過々此瞬間の煌めきに全身の血潮は、一層激しい波動を傳へるのであつた。湛えた水に潔められた夏尙涼しい手術室にきらめくメスに反映する紅の閃光の戰慄と、手術臺に身を横たへてコロロホルムを嗅ぎながら專念に死を思ふ神聖さ！ コロ〳〵と、廊下を轉がり行く患者輸送車の謢謨輪の單調な響きは、輕いスリツパの響きと縺れ合つて、幾度か扉の外を遠ざかつたり近づいたりしてゐる。明後日、此響きと響きの縺れが私の病室の扉の前に止つた時は、今一回の切開手術――上層と上齦を切り離して――の爲に、私が連れられて行く時である。『あゝ、メスの光の悲しさよ』靜かに眼を瞑つたまま、無限の刻みを與へる鮮かなタイムの囁きに耳を傾けた。

――醫專附屬醫院に病める日――

ビアトリス社詠草

平間蒼生

—炬燵をあけし日—

母上は我が歸省の日を待ちかねて衣あたゝめし
炬燵なりけり

—父の歸るを見送りて—

日曜の夜勤に歸る父上の提灯の火の霧にかくれ
ぬ
醉ひざめて寒くもあらん淋しくも勤めに歸る老
ひし父君
朝夕に育てし菊の色あせてたほれし見れば我も
はかなき
入相の鐘の消ゆるもまたずして暮れ行く秋の夕
淋しき
時々に暗き影そふ我が心姿は君にあるかとぞ思
ふ
死燒く黑き煙の赤くなりぬ雁渡る秋の夕空

吉田ハル

夕ざれば病葉（わくらば）しぐれ冷めたさよ待てども君は此
門にこぬ
夕べちる木の葉あまりにしげければ君がいたつ
きおもほゆるかも
丘にきて枯野の野火をかぞふるも嬉しきことの
一つなりける
枯野風はげしき夕べ木の下にかたゐの翁うつぶ
してゐぬ
丘に立ち枯野の原を見下せば風見鴉（かざみがらす）の二つ三つ
飛ぶ
丘の上の鐘樓あらはになりにけり枯れて立ちた
る木々の間に
物はめる乞食（かたゐ）をとりまく子守り等の頰を照せる
夕日の赤き
廢廊の南にかたゐはうつぶして日を浴みてをり
物をはみつゝ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

矢木小百合

―秋より冬へ―

これやこの燃ゆるがごときもみぢ葉を吹きか散らしてふゆにいるなり

靜かなる冬のまひるを傀儡師聲張りあげてうちひけるかも

なにごとぞふたりしてゆくこの旅に雨ふりいでぬ空のうらめし

相逢へば泪して言ふ君なりしいまいづこにか泣きておはさむ

はる／＼ときぬるものかな浪花津の道頓堀の夜を歩みて

きんらんの帶をだらりに結びたるお七かはいや戀に死にけり

星長晴子

落穂はむ鳥の群ゐてしつとりと刈田の土はしめりけるかも

あかねさすこの青空の廣らかに光るとみえつ飛ぶ飛行機は

機影四つ書寫の山路のいたゞきを行くかと見えつひくふとぶなり(飛行機來る)

まつしろなもやゝに晴れて東は朝日うら／＼飛行機に輝る

小泉くに子

おもしろき身ぶり手まねのいたましや彼れも人なりもの云はぬかも(唖人)

君想ひ衣縫ひ子等を教うべき我が身なりとは誰か知るべき

君故に此の一年を如何許り美しと見し短しと見し

愛らしく我が名を呼びて他人の子は顔あからめてうつむきにけり

飯島富久子

愛らしき雀二羽程秋雨にぬれて落ち葉の上を歩める

朝の雨鏡のそこの冷たさに吸はれて秋のゆかんとすらん

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

われ女君いくたりを愛するともつゝましやかに生きよといふか

天地の廣さになげて我が心なほなぐさまず秋ふかみゆく

筑波ねに初雪の見ゆこの朝利根ゆく舟の影もつめたき

土井かちみ

荒れはてし秋園のなか野菊葉に白き朝霜ふりにけるかな

わびしげにねむれる祖母の枕もとに思はずよりて面ながめたり

哀れなる聲をはなちて泣きにけるかごの小鳥の雪の朝かな

此の病誰れにかたらむよしもなしひとりなやみて泣きにけるかな

いたづらに心亂るゝ今宵かな父はあれども母はあれども

關口春子

くれなゐに椿は咲きぬひたすらに君をおもえる少女のまへに

なつかしき君ある都思ふかな其窓に今日は雪ふるならむ

思守草子

願ぎごとはみな仇となり身ひとつに殘るおもひの秋に入るかな

たゞひとつ梢高くも散り殘る木の葉に似たるわがこゝろかも

朝まだきさぎりのなかをいそ〳〵と務めにいそぐ身のかろきかも

夕ざれば君の戀しもちら〳〵と瞳に似たる星のまたゝき

石井俊子

永久に一人なるらしあきらめし吾戀なれど涙ながるゝ

何事を思ひ結ぶや知らねども君見て共に涙ぐみけり

せんなさに迷ひ〳〵て泣く吾をあやしみて問ふ母のかなしや

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

浅野英子

春の水静けく流るゝ野邊の春君とかたりしその野邊の春

ビユ〳〵と風吹きすさむ此の頃は君戀しさにたへられぬかな

守屋光子

—父の墓參りして—

そとふれば石の冷たさ身にしみて共同墓地に秋ふかみ行く

黄の小菊垣根深くに伏し居たり一輪なればいとしかりけり

芙美子

眞白なる富士の高嶺をあほぎけり己が心も清くけだかく

思出の糸をくりつゝなつかしの君ぞと思ひ針はこぶなり

小林かね

土蜘蛛の巣にかゝれる小虫懸命にもがきてをれり此夕まぐれ

あかねさす夕日のかげに一人たちて秋はゆけりと悲しみにけり

冷花

幾日か暗きをもひのつゞきては涙する日の多く成りけり

此の秋を君と逢ひ見ることもなく山の温湯に病める我れかも

京野世枝子

よりにくゝよりなつかしきこのこゝろ君も知る故いや淋しかも

市花小ゆき子

何事の望とてなし身二つとなる日いや遠し今日も晴れつゝ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はるみ

横山千代子

竹のうれあけがたちかき風にゆれさら〳〵鳴るにわが目ざめけり

春の雨音も靜にふりつゞく一日を物ぬひくらす我かな

市瀬君子

若草は靑く萠ゆれど病みやせの吾がはだへの悲しき春かな

波香

君は出てゆきけり我れひとり冷たき飯を食むも淋しき

杉淵梅

暮れかゝる廣野に鳴るは始めなく終りを知らぬ天地のこゑ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

編輯雜感

■春は一日暗く一日明るく、きのふは陽がてりました、けふは牡丹雪が降り出しました、寒かつたり暖かかつたり、猫の瞳のやうに空の色をかへながらでも次第にその眞正面の姿を私達の前に進めて來ました。この四月號の「ビアトリス」か皆様のお手にわたります節はきつと、社の近くを流れてゐる江戸川の古い枝ぶりのいい櫻も、眞直に上に向いて伸びる事よりほかまだ知らない若木の櫻もともに小さい、けれどもみづ〳〵しい白い花を開いて、川舟の上にその影をほんのり淡く染める事でせう。

■かうして今年の春は來ました。そしてわたしの胸にも生き生きした心持が還つて來ました。勉強も仕事も亦新しい力のもとにいとなまれるやうになりました。私は冬の間中ずつと消燈してあつた電燈を今日の午後、會社の人に來てもらつて電流を出して貰ふ事にしました。寒い間はいくぢもなく縮くまつて一つの電燈の下で、それも私だけは日が暮れると睡たくなる冬時の習慣から暗くさへなれば寢て了つてゐたのでしたが、今日からはさうではないのです。此頃は庭が暖かいので私は夜の時間を充分に有益にしようと思つてゐるのです。

■二つの電燈があか〳〵と私の內職のペンの上や、他の者の詩作のペンの上に降りそそいで、夜も次第に更けようとした時、山田たづ子さんか、そこまで來たからとおつしやつて立寄つてくれました。それから『ビアトリス』の事や、最近の閨秀作家の作品の事などを話してゐるうちに、ふと一點の混亂から二人は激しい擊となつて二時間あまりも言葉をすり合はせました。話題は『無智な善良と智識ある不善』といふやうな事や『弱點を見せる人或る缺陷のある批判』などでありました。十一時頃、山田さんの歸る頃にはもう私達は――私は柔かにほぐれた快いいゝ氣持で、お見送りしてゐました。

■ビアトリスは今年に入つて一ケ月休刊しました。それは私たちの微力であることが幾分か原因とはなつてゐませうが、やはり大部分は同人文藝雜誌共通の經營難にぶつかつて大きい難義をしたからです。けれどもどうかこれを見て下さい。『ビアトリス』はもうくぐり拔けました。ともかくも今はくぐり拔けました。この先またどんな暗礁があるかそれは分りません。唯私たちは心の底から四月號の出たといふ事をこんなに喜んで居ります。こんなに私達は今月號の幸福を感じてゐます。ここに詳しい內狀は書きませんけれども、それはほぼ皆樣に御想像のつく幹部の努力なのでございました。

■此頃ではどこでも直ぐ話に出る事ですが、女流の文藝がよほど盛んになりました。「中央公論」と、「黑潮で」看板娘といつたやうに新しくそれ〴〵一人の作家を紹介してから若い女流作家が、またもどん〳〵と出て來さうで、創作の方では近來にない景氣らしうございます。ところでかういふ徵候は決して私どもの爲めにも惡い事ではないと思はれます。『ビアトリス』の將來の爲にもきつといい事に相違ありません。今の『ビアトリス』には歌の方と、小說の方としか向いてゐる人が見られませんが、どの方面にしろ自分一つの力で開拓して着々進んで行かなければ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ばならないと思つてゐます。そして分つた人、話する人そしていい作をする人がもつと多くならなければならないと思つてゐます。

■今夜四時間あまり一時は息を荒立ててまで話した跡の、山田さんと別れてからの快い心持！　私は『ビアトリス』の多くの方々とみんなでこんな心から心に傳はるやうに交り語る時間が持ちたいと思つた事でした。けれども私は社交に缺點の多い人間です、するとさういふ貴女故警戒しないでいつでも信用が出來る。また腹の立つた時でも貴女を知つてゐるだから容易に理解が出來る、とかう山田さんは今歸る時お云ひでした。勿論私はそれに甘んじて自分の社交的缺點をいゝ氣ですます事は出來ませんけれど、かう理解してくれるといふ事は有難い事です。

■感想評論がいつでも少いので、昔私はよく感想を書いたものですから、どうかすると書かうと思ふ事もあるのです。けれども一體今までの私の感想は自分の弱點を自分の心の前にあばいてそこから次の生き方を探すのが基調だつたのです。そしてそれはやつつけてやらうと思ふ人には容易にやつつける事の出來る隙だらけな一面觀になり易いのでした。つまり敍情詩といふべきものであつたのです。そしてそれは非常に私生活の上に損害を往々うけた事であつたのです。『善良だけれども發表の下手な人』と今夜山田さんのいつたその種類の人間だつたのです。

■けれども此頃は私は心からこれからはさうではないのだといふ氣になつてゐます。これからも心ではその道程を取つて生きて行くのは勿論私にとつて大切な事であるが、それを發表しない方がいゝと云ふ氣持となつたのです。それで感想でも自他の問題に理智で觸れる感想を書かなければならないと思つてゐるのです。さうするともう敍情詩ではなくて論文であり批評的な感想でなければならない。實際今まで私はどうしてあんな封建時代の空氣ののこしたそのまゝの感情のみの生活ばかりで、正直――それは無智のことです――あの理智的な團體である『靑鞜』の人達の中で何等の自分に對する疑惑なしにぼんやり來たものだらうと驚かれる位です。

■けれども私の素質はやはり敍情詩人の素質で、批評家の素質ではないといふ事を感じてゐます。非常に近代的でない新しくない性格であると考へてゐます。ですから今の私の轉換は敍情詩的な小說にうつり、それから年とともに理智に對する頭腦の冴えや、自他に對する見識の明晰を蓄へてゆかうといふ方針で居ります。ですから私は今の眼前の些細な「雜誌の賑かし」の爲この方針を犧牲にしてはならないと思つてゐるのです。

■兎に角過去から今までの私を考へると、そこには精神的にも物質的にもかなりに自營と開拓、擴大と向上とが成しとげられて來てゐる事に私は自信を持つ事が出來ます。そしてこれから未來に對しても、それはどんなに遲々たる步みであらうとも生長してゆくに相違ないとも思はれてゐます。それで私は心をやすめてはならないと思つてゐるのです。（以上花世）

私がこの凝惑を發表するといふ事については可成り長い間考ひもし苦しみもし躊躇もしました。無學な上に無智な私は近代の思想と云ふものも知らずに、たゞ一人娘として片田舍に幼ない子を守りながら幾年かを過して居たのでしたが、私の境遇の變化したある時期から、あまりに豫期しない多くの苦痛や悲し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

みを經驗しなければなりませんでした。
さうした私から生れた「この凝惑は拙ないながらも書かずには居らない内部衝迫から書いたのではありました。
然しこれが藝術品として皆樣に讀んでいたゞけるやうなものであるかどうかと云ふことに思ひ到りますと私は苦しくなります、主義も思想もこれと云つてつかみ出して表現することも出來ないほどの私がどれだけ自分の思ひを逹することが出來たでせう、まして讀んで下さる皆樣には道端に落ちてゐる紙屑にも等しいものかも知れません、私はたゞ斯うしたものを書いた事が動機となつて、今まで私が書きたいと思つてゐた事が書ければよいと思つて居ります、私はこの「凝惑」を發表する時が私の生涯中に決してあつてはならないと云ふやうな心持ちで今まで堅く／＼抱きしめて居たのでありましたが、私はもはや力がつきてしまひました、而して私は新らしい勇氣と力とを得たいために「凝惑」を發表することにいたしました。「凝惑」の原稿を手離した私の心は絶望とあきらめに近かい悲哀の中にかすかにおのゝいて居ります。（阿佐緒）

■ビアトリスの四月號がこんなに早く皆樣のお目にかけることが出來ましたのはほんたうによろこばしいことであると存じます。

■これからも此ビアトリスを益々よくすることに私逹は努力いたしたいと思ひます。どうぞ皆さんもお力をお貸し下さい。

■維持會は矢張從前通り本誌の經濟方面を援助下さる團體として設られてゐますからどうか援助の御好意をお寄せ下される方は御入會下さい。

■維持會費は甲乙の二種で一ケ月甲は一圓乙は五十錢で何れも期限は一箇年です。尙期限後甲種は二箇年間ビアトリス及びビアトリス社出版の書籍を寄贈し、乙種は期限後一箇年間ビアトリスの寄贈すること。

■最近に維持會員にお成り下さいました左の諸氏にお禮申上げます。

羽太鋭治氏（甲種）小泉くに子氏（甲種）淺野英子氏（甲種）淸水貞子氏（甲種）今井稲子氏（甲種）

■ビアトリス文藝研究會は今迄通り設けます。此會では皆樣の作品の批評添削及び集まつて談話會を致します。會費は三拾錢でビアトリスの寄贈を致します。

■二月號に廣告いたしました女性は一時延期いたします。女性に御投稿下さつた諸氏はどうぞ今後は文藝研究會へ御入會下さい。皆さんのお作の中で優秀なものはビアトリス誌上に掲載いたします。

■珊瑚礁の發刊　詩歌を中心とせる如上の雜誌が神田の猿樂町十三の同社から發行せられました。今社友の募集をして居られるさうです。

■寄贈雜誌　淑女畫報、婦人、スネーク、麈勞、金泥、みどり兒、星座、ろざりよ、自由新聞

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

同人規定

一　ビアトリス社は文藝を愛好及創作する女性を同人とす

二　同人を希望する者は創作（但種類を問はず原稿紙二十枚前後のもの）二篇に寫眞及び履歴書を添へ本社宛に申込まるべし

三　同人費　甲種一圓五十錢　乙種一圓
　　丙種五十錢

四　同人費の差違は資格に差別なし只各自經濟如何に依られたし

ビアトリス社野遊

空が美しく晴れて酣な春が參りました。此好期に際して社では同人の野遊（ピクニツク）を致したいと存じますどうぞ同人及び會員の皆さん萬障お繰合せお出で下さい。

場所　小金井

期日　四月八日（日曜日）午前八時半

集合所　新宿停車場一二等待合所

會費　一圓二十錢（往復汽車賃晝飯共）

申込期日　四月六日迄

申込所　ビアトリス社

雜誌規定

□毎月一回一日發行

□定價一册貳拾錢(郵税壹錢五厘)

□前金購讀料 三ケ月分(六拾錢)
六ケ月分(壹圓拾五錢)
一ケ年分(貳圓三拾錢)

□廣告料一頁 特等(參拾圓) 壹等(貳拾圓)
貳等(拾五圓) 三等(拾 圓)
半頁(五 圓)

□郵券代用は壹錢貳錢に限る(但し一割増)

□編輯、經營、會員申込の事務は一切ビアトリス社宛のこと

□原稿〆切期日は十日限りとす

大正六年三月二十八日印刷納本
大正六年四月 一 日發 行

編輯兼發行人 東京市牛込區築地町六番地 山田たづ

印刷人 東京市麹町區紀尾井町三番地 金澤求也

印刷所 東京市麹町區紀尾井町三番地 元眞社

發行所 東京市牛込區築地町六番地 ビアトリス社

發賣所 東京堂 東海堂 良明堂 北隆館

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四月の三越

第卅三回新柄陳列會
■一日より廿日迄

寄切見切反物賣出し
■一日より廿五日迄

洋傘陳列
■一日より…………

五月人形陳列會
■五日より五月四日迄

懸賞裾模樣圖案陳列
■十日より廿日迄

東京 三越呉服店

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四月の三越

夏物新柄陳列會

寄切と袋物陳列

洋傘陳列

五月人形陳列會

懸賞[illegible]圖案陳列

三越呉服店

『ビアトリス』解説・総目次・索引

不二出版

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

I 解説

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

解説執筆者紹介

岩田ななつ　いわた・ななつ

鶴見大学、明治学院大学非常勤講師。博士（文学）

一九六四年　山形県に生まれる

一九九〇年　大妻女子大学大学院文学研究科国文学専攻修了

一九九九年　鶴見大学大学院文学研究科日本文学専攻博士後期課程修了

著書　『青鞜の女　加藤みどり』（青弓社　一九九三年）

『文学としての『青鞜』』（不二出版　二〇〇三年）

共編著　『『青鞜』を読む』（學藝書林　一九九八年）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

解説

岩田　ななつ

『ビアトリス』は、一九一六（大正五）年七月一日に「文芸を愛好及び創作する女性」を社員として創刊された女性文学雑誌である。『青鞜』（一九一一年九月創刊）が無期休刊になったのが、四カ月前の三月（二月号まで刊行）。『青鞜』に関わった女たちの多くが、『青鞜』を引き継ぐ形で、『ビアトリス』に名を連ね、再結集した。

編輯兼発行人は、山田たづ。発行所は、東京市牛込区築地町六番地・ビアトリス社である。毎月一回一日発行の月刊誌で、定価は『青鞜』と同じ二五銭である。一九一七（大正六）年四月の廃刊まで、途中一回の休刊（一九一七年一月）を挟んで、一〇カ月にわたり全九冊（うち二冊未見）発行された。

表紙絵は、創刊号が上野山清貢（きよつぐ）（素木しづの夫）で、一巻三号（一九一六年九月）から五号（一一月）までは奥村博（平塚らいてうの夫）、六号（一二月）になると表紙絵はなくなり、目次がそのまま表紙となる。さらに二巻一号（一九一七年二月）から三号（四月）の廃刊号までは、「英国リバープール博物館所蔵・ダンテとビアトリスの邂逅――ヘンリー・ホリデー作」と記されたものを、表紙絵として使用している。

ここで編輯兼発行人の山田たづと、創刊までの経緯についてまとめてみる。とはいうものの人名辞典類に、山田たづの名前は見当たらず、私自身まだ全体像はつかめていない。そこで、断片的ではあるが、当時の雑誌の記事から、その一面だけでも提示してみたい。

たとえば、一九一六年八月『女の世界』（一巻九号）の「大正婦人録」には、「山田たづ　明治二十四年八月八日、滋賀県大津市に生る。滋賀県大津高等女学校卒業。『鬘師の家』『小照』等の作あり。ビアトリス社同人。現住所、牛込

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

区築地町六番地」と記されている。さらに同じ号の「第二期の新らしい女」には、「山田たづは滋賀県大津の生れで、三四年前に土地の女学校を卒業すると、直ぐ様上京して森田草平氏の門下となり、将来は小説家として立たうと云ふ志望を持つてゐる。『新公論』とか或は其他の雑誌にも小説を発表してゐる。（中略）今度のビアトリスの抑々の発案者で、それ故ビアトリス事務所と云ふのも、その寓居であるところの、牛込築地町の勝川と云ふ酒屋の二階におかれたわけである」と説明してある。『新公論』には、森田草平の紹介文「作者が彼方の人で殊に女性で有るだけに薄暗いやうな京都の家庭と和らかな京言葉に伴ふ気分は男の作家の手になつたものよりも一層しみ〳〵と身に沁みて出て居る」をつけて、「京の鬘師の家」（一九一五年六月号）が掲載されている。なお『新公論』には、村岡（のちの森田）たま、素木しづの名もあり、草平門下の作品掲載の場であったことがわかる。しかし、『新公論』における山田たづの活動は、これ一作のみで終わったようである。

ところで、たづの出生年が一八九一（明治二四）年とすると、『ビアトリス』創刊時は二五歳。たづは、平塚らいてうより五歳下で、伊藤野枝より四歳上。三、四年前に上京ということであれば、ちょうど『青鞜』の時代と重なる。しかし、『青鞜』社員にはならず、さらに野枝の手にわたって社員制が解体した後に、作品だけ掲載するというような立場もとっていない。もちろん『青鞜』に無関心ではありえない。読者として、手にとっていただろう。それは、一九一一（明治四四）年一二月『女子文壇』「誌友くらぶ」に、「山田たづ子・近江大津市松屋町八八」の名があり、「書籍換読」として読みたい雑誌に『青鞜』を希望していることから推測できる。たづは『女子文壇』の投書家であった。一九一二（大正元）年一一月の『女子文壇』には、水野葉舟選で短編小説「秋の女」が、「近江・わかば」の筆名で天賞に選ばれ掲載されている。選評「階上の書斎より」を読むと、「わかばの「秋の女」大分根底がしつかりして来た。この道から進めばいゝ、これからあるけばいゝ」と好意的な励ましの言葉があり、『女子文壇』という場所で成長を続けている様子がうかがえる(1)。

ところで、この「秋の女」はどのような小説であったか。簡単に説明すれば、そこには、「自分で自分を養つて行く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新らしい生活に」興味を覚え、女学校卒業後に田舎町の小学校教師を続けていた藤子が、すでに二四、五の色の褪めた女になってしまったと寂寥感を覚えはじめたある日、良縁が舞い込み心かたむくが、「何処かに自分の描いてゐるやうな男はあるやうな気がした。心の通はない先に先づ身体を与へてかゝるといふことは、藤子には堪へ得られない事」と悩む姿が描かれている。藤子は、教師という職業に苦痛や不安を抱きながらも、生活のためだけにする結婚を厭い、漠然とではあれ理想を求めている女である。これはまさに、『青鞜』の女といってもよい。つまり『青鞜』の小説と響きあう思想を、山田たづの小説は抱えもっていたのである。しかしながら、山田たづは『青鞜』には関係しなかった。その理由はわからない。この点、同じ森田草平門下で、『ビアトリス』の発起人に名を連ねた素木しづ、社員になった村岡たまも『青鞜』に参加しなかったことが、その理由を推測する(2)一つのてがかりになろうか。

山田たづは、『青鞜』創刊前から『女子文壇』の投書家で、同じ時代を生きる女として『青鞜』に関心を抱きながらも、一定の距離を置いた。『青鞜』という場に対する違和感と人脈上の理由があったのだろうか。

ところで、森田草平と生田長江が主宰した『反響』(一九一四年四月〜一九一五年九月)には、素木しづ、村岡たまは執筆しているが、山田たづは見えない。前述の『女の世界』の記事によれば、「三四年前に土地の女学校を卒業すると、直ぐ様上京して森田草平氏の門下」となっているので、『反響』刊行時に参加しても不思議ではない。推測の域を出ないが、『女の世界』の記事が間違いで、たづが森田草平の門下生になったのは、素木しづ、村岡たまが入門した一九一三(大正二)年より後であり、『反響』刊行時にはまだ入門したばかりで掲載する作品がなかったか、あるいは入門前であったのかも知れない。ともあれ、『ビアトリス』創刊時に「将来は小説家として立たうと云ふ志望を持つてゐる」と記されているのであるから、まだ未知数の作家であったのだろう。

次に『ビアトリス』の誕生過程を考察する。資料としては『ビアトリス』発起人の一人で、創刊から四カ月後(一九一六年一一月)に退会届けを出す、五明倭文子の「ビアトリス社同人に与ふ」(『女の世界』三巻一号、一九一七年一月)を参考にする。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『ビアトリス』発刊のために、山田たづと生田花世が動き始めるのは、「Tさん（たづ――筆者注）とHさん（花世――筆者注）と二人して、矢来のあの家へ訪ねて来て下すつたのは、丁度此年の五月の末頃」と記されているから、一九一六（大正五）年五月半ば頃である。この時期から、『青鞜』との関連が想起される。『青鞜』は同年二月に六巻二号が出た後、何の説明もなく三月、四月と休刊を重ねていた。しかし終に四月下旬には、伊藤野枝が辻潤との生活を捨て去り、大杉栄を選んだことが新聞ざたになる(3)。この事実が発覚したとき『青鞜』に集まっていた女たちは、その廃刊を実感しただろう。もちろん、作品掲載の場として考えれば、『女学世界』『婦人世界』『婦人公論』など、商業的な女性雑誌は少なからず存在していた。しかし『青鞜』のように、無名の、まだ未熟な作品であっても、与謝野晶子、長谷川時雨、岡田八千代など、いわゆる著名作家たちと、対等な活字で並んで掲載される女の雑誌はなかったと言っていい。五明倭文子も、一九一五（大正四）年五月、野枝の時代の『青鞜』五巻五号から小説を掲載し、最終号となった六巻二号に、長編小説を連載中であった。掲載の場を突然失った倭文子にとって『青鞜』の無期休刊は、「引継いだ女が無分別から勝手に投げ出して了つたんですから」（前記「ビアトリス社同人に与ふ」）と、野枝を非難する言葉で記憶されるべき事件であって、惜しむに余りあることだったに違いない。

これらを踏まえれば、山田たづは『青鞜』に直接かかわってはいなかったが、『青鞜』に集まっていた女たちの、喪失感は感じ取ったと思われる。その上で喪失感よりは、頭上の重しが取れたような解放感を、つまり既成の雑誌のなかに入るのではなく、自分自身が中心となって新しい雑誌を創ってゆくことができるというような気持ちを抱いたのではなかろうか。

ところで、倭文子は発起人にと勧誘にきた二人に、生み出す雑誌の名を聞くと、たづは「まだ、しつかりとは定りませんけれど、大抵、ビア、ビアトリスといふんでせうと思ひます。I先生が初じめ『誘惑』といふのがよからうと仰有いましたけれど、それぢやあ余りね、世間のお母様達が困つちまいますから」（前記「ビアトリス社同人に与ふ」）と答えたという。さすがにこの『誘惑』に対しては、倭文子も「左様ですね、これから妾もお仲間に入れて戴くのに、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一々『之が誘惑のSさんで』なんて紹介されても困りますわね」とからかって、二人を笑わせている。はたして、この『ビアトリス』の名付け親になったI先生とは、誰を指すのか。森田草平では、Iのイニシャルと一致しない。推測するに、生田長江ではなかろうか。生田長江といえば、らいてうに女性文学雑誌の発刊を勧め、「いっそブルー・ストッキングはどうでしょう。こちらから先にそう名乗って出るのもいいかもしれませんね」(『元始女性は太陽であった――平塚らいてう自伝 上』大月書店、一九七一年。以下『元始』と略す)と、『青鞜』の名付け親になった人物である。その一方で、『青鞜』が女性問題へ目覚め、女性解放思想を強めてゆくに伴い逃げ腰になって、一九一三(大正二)年五月の『青鞜』三巻五号以降手を引いたと、『元始　下』(四五二頁)に記される人物でもある。しかし、『青鞜』から離れたとはいえ、前記したように長江も主宰者のひとりである雑誌『反響』には生田花世、伊藤野枝、らいてう、岩野清、上野葉、加藤みどり、小林かつ、など多くの青鞜社社員たちが執筆している。貞操論争の舞台にもなり、むしろ『青鞜』の広がりの場を作ったと見なすこともできるのである。『ビアトリス』の名付け親が長江ならば、『青鞜』前史に位置する「閨秀文学会」も彼が中心人物であったわけであり、女性文学と雑誌作りに強い関心を抱いていた長江像が再確認できよう。

ところで、この雑誌名である。創刊号には「『ビアトリス』とは御存じの通り、詩聖ダンテが、神曲の中で久遠女性と讃美した崇高な女性の名でございます。女性としての真と美と愛の権化として歌はれた此の美しい名は、私どもが女性としての立場なり生活なりを、思索したり創作したりする雑誌の名には何よりだと思つたのでございます」と説明されている。確かに、ビアトリスは「崇高な女性」ではあろう。しかし、それはあくまでも男性にとってであり、主体として生きる女性を示す名ではない。このような疑問は、当時の共通認識のなかにも存在したようである。たとえば、前記「第二期の新らしい女」(『女の世界』)は、「第一期の新らしい女の多くは没落し、残つてゐる平塚雷鳥、伊藤野枝、神近市子などの数人が或は自分の道に迷はんとしてゐる時、ビアトリスの同人に依つて第二期の新らしい女の清新なる群が生れたことは悦ぶべきことである」「新らしい『ビアトリス』は、古い『青鞜』よりも進歩した思想を含むであらう」と、その船出を言祝いだ後、「唯、其の雑誌の名の、後に生れたものが、前に去つたものよりもよりク

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ラシカルな点を異とするのみ」と、さりげなく、しかしながら鋭く古風な点を指摘しているのである。

さて、その『ビアトリス』創刊号に集まった人々は、次の通りである。なお、参考まで『青鞜』に関係した人物名の後ろに、*を記した。

賛助員（一七名）

生田長江* 長谷川時雨* 徳田秋声 小川未明 太田水穂 岡田八千代* 尾島菊子* 若山牧水 河井酔茗 与謝野晶子* 田村俊子* 中村孤月 窪田空穂 秋田雨雀 水野葉舟 平塚明子* 森田草平

発起人（一四名）

生田花世* 原阿佐緒* 岡本かの* 岡田ゆき* 若山喜志子 加藤みどり* 吉屋信子* 山田わか* 山田邦子* 山田たづ 五明倭文子* 斎賀琴子* 素木しづ 杉浦翠子

社員（発起人を省くと一八名）

原阿佐緒* 岡本かの* 岡田幸子（ゆき）* 若山喜志子 加藤みどり* 吉屋信子* 山田わか* 山田邦子* 山田たづ 生田花世* 五明倭文子* 斎賀琴子* 素木しづ 杉浦翠子 村岡たま 世良田優子 新免栄子 江森笙子 岩淵百合* 斎藤京子 佐藤幸子 久保田富枝* 松井静代* 望月れい* 平塚つげ枝 草野百合 小林とみよ 坂本真琴* 馬淵さわ子 井口ますゑ 小口みち子 吉村（千原）代志*

以上のメンバーを分類すれば、花世とたづが出会った『女子文壇』関係者、『青鞜』関係者、森田草平門下生、さらに重なり合う部分もあるが山田わかと嘉吉の語学塾に学ぶ人々、に分けられる。そして、それらをつなぎ合わせたのは、文壇事情に明るい生田花世だった。

ここで、『ビアトリス』創刊前の生田花世にふれておきたい。女性文学史の最初のものといわれる『近代日本婦人文芸女流作家群像』（行人社、一九二九年）を著した生田花世は、一八八八（明治二一）年徳島県に生まれた。徳島県立高等

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女学校卒業後、小学校教師をしながら『女子文壇』の投書家となり、その誌上で、河井酔茗、山田邦、水野仙、若山喜志、杉浦翠たちと知り合い、一九一〇（明治四三）年には家出同様の形で上京。生活難のなかで『青鞜』にも執筆。一九一四（大正三）年一月に『青鞜』に掲載した「恋愛及生活難に対して」（四巻一号）を読んで感動した生田春月と、熱烈な手紙の往復を経て、同年三月に結婚したことは、よく知られている。世話好きで面倒みがよく、一九一五（大正四）年七月に野枝が出産のため、九州の実家に帰った時に、『青鞜』の編集を引き受けたのも花世であった。また、一〇月には水野仙に誘われて読売新聞社に入社。翌年の三月末頃までの約半年、婦人欄の記者として活躍する。たづが、『ビアトリス』創刊の話を持ってきたのは、花世が新聞記者をやめて、春月の仕事を手伝いながら、自分自身の創作活動を再開しはじめた頃だった。「発表したいと思つても其の方法のないのに苦しんでゐた」（「編輯雑観」『ビアトリス』創刊号）花世には、その誘いは飛び上がるほど嬉しいものだったに違いない。

ところで、『ビアトリス』創刊のための経費は、誰が負担したのだろうか。『青鞜』の場合は、らいてうの母が、娘の結婚資金として貯金していたなかから、最初の印刷費一〇〇円を出してくれた。のちに花世が、長谷川時雨から請われて編集にたずさわることになる『女人芸術』（一九二八年七月～一九三二年六月）は、時雨が夫の三上於菟吉から提供された二万円が元手だった。当時の花世にお金の余裕があったとは思えない。とすると、たづ個人の資金だったのだろうか。疑問が残る。

ともあれ、山田たづと生田花世とが中心になって、「女の文芸雑誌は今のところ一つもありませんから好く行くでせう」（「編輯雑観」『ビアトリス』創刊号）と、賛助員たちにも励まされて、『ビアトリス』は生まれた。

『ビアトリス』の目指した姿は、「ビアトリス社清規」第一条の、「本社は文芸を愛好及創作する女性を社員とし雑誌ビアトリスを刊行するものとす」が端的に示している。

青鞜社概則第一条は「本社は女流文学の発達を計り、各自天賦の特性を発揮せしめ、他日女流の天才を生まむ事を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

目的とす」であり、一九一三年一〇月の規約改定後は「本社は女子の覚醒を促し」と変わり、さらに野枝編集の『青鞜』においては「無規則、無方針、無主義、無主張」と、アナキズムの思想を打ち出していた。

『青鞜』と比べると、『ビアトリス』は、純粋な女性文学雑誌を理想としていた。あえて言うならば、『女子文壇』の流れに近いのではないか。のちに生田花世は、『青鞜』と『ビアトリス』の関係を質問され、「『女子文壇』というのが四、五年前に『青鞜』よりも早く世の中へ出て、これをリードしたのが男のかたで、自覚運動ということを吹き込んだわけです。女性よ、自覚せよ、と。それで各地がみんな動き出した。そのなかに小説を書くものがいたわけです。それが青鞜社のある間は、そこへ部屋借りしていましたけれども、これがなくなつて、今度これをやりましょうというので、十人ぐらいでくんでやつたのが『ビアトリス』です」(「『青鞜』の思い出」(『国文学 解釈と鑑賞』一九六三年九月)と答えている。

しかし『青鞜』の時代を経て、その『青鞜』の女たちが『ビアトリス』に名を連ねている以上、たとえ『ビアトリス』に『青鞜』ほどの思想性がなかったとしても、女性文学雑誌と銘打てば、『青鞜』の後継誌と目されるのも当然であった。「第二期の新らしい女」(前記『女の世界』)には、次のように記される。

散り散りバラ〳〵になつてゐた第二期の新らしい女の中の十四五人が、今また或る一つの集団を作つて第一期の新らしい連中に劣らぬやう漸く世間から忘れられやうとしてゐる新らしい女と云ふ言葉を復活し来らんとしてゐる。七月一日其の初号を発行した『ビアトリス』は即ち其の機関雑誌である。

さらに創刊から三号を重ねた時期には、「『新しい女』の新しい団体」(『東京朝日新聞』一〇月二七日)との見出しが目を引く。

四散した青鞜に次いで興つたビアトリス社の会員は二百人に余るといふ、尤も此社中は青鞜程大胆な自由思想を持つては居ないやうだが社会的に活動する点に於ては青鞜も遠く及ばない、先頃女流文学者の追慕会を開いて未だ間もないが近く又絵画展覧会を開くと云ふし、それから有楽座あたりで芝居もすると云ふ、(中略)青鞜全盛

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時代に新らしい女の参謀と云はれた生田長江は此社の為にも後盾となつて居る、すると又新らしい女の箱屋とい
ふのがある、名を中村孤月といふ

このように、『青鞜』が「日本に於ける第一期のブルー・ストッキング」（前記「第二期の新らしい女」）とすれば、『ビアトリス』は「第二期の新らしい女」と期待されていたのである。

『ビアトリス』の発行とその経営は試行錯誤の連続だった。まず一巻二号（一九一六年八月）には、突然「ビアトリス社会員組織解散」の知らせが載る。その意図はわからないが、従来の会員を直接購読者と変更するだけのものであるようだ。理由は「雑誌経営上の或る事情から」と説明され、「社運に心配」はない、「安心して下さい」と記される。

一巻三号（九月）になると、ビアトリス文芸研究会が発足する。「清規」には、「本会は女流作家の揺籃とも称すべきものにして主として作品の批評添削に応ず」、「本会は文芸を愛好し創作する女性を会員とす」、「年二回雑誌ビアトリスに新進作家紹介号を出し会員の作品を広く文壇に紹介す」、「毎月一回研究会を開き文壇大家の講演あるべし」、「選者（小説）森田草平氏、（小品）未定、（評論感想）生田長江氏、（短歌）編輯局選」とあり、無名の新人を育てようとする研究会であることがわかる。

一巻五号（一一月）に移ると、社の基礎を強固にし、出版にも手を伸ばすためにと、ビアトリス社維持会の募集を始める。維持会は『青鞜』でも、補助団として作られた方法であり、説明を読むとほとんどそれを踏襲している。しかし、具体的に維持会に誰が入ったのか、どのくらいの人が維持会員になったのかは不明である。

さらに、一巻六号（一二月）には、「十一月の間に杉浦翠子さんと、五明倭文子さんとが、退会を新聞で御発表になつたやうでございます」「其間に毫も不快な事のなかつたのを皆様に瞭きり御知らせいたして置きます」と、『ビアトリス』発起人の内部分裂の気配が記される。新たな責任者たちに、「山田邦子、岡本かの子、坂本真琴、岡田幸子、原阿

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

佐緒、斎賀琴子、久保田富江、小林益子、生田花世、山田たづ」ら、一〇人の名が並ぶ。脱退者の一人、五明倭文子の前記「ビアトリス社同人に与ふ」によれば、雑誌の目指す方向性の違いが不和の原因であった。純文学雑誌だから売れなくてもいい、高尚なハイカラな雑誌を出そう、との意気込みに対し、倭文子はそれは確かに理想ではあるが実際売れなくてはどうしようもない、もっと編集に変わった巧い色彩をつけたいと提言しても受け入れられなかった、と述べている。さらに倭文子は「一体ビアトリス社の人達は団結力といふものがまだ欠けてゐると思ひますね」「Tさん初め現在同人達の中に、あの青鞜発刊当時の平塚さん程の思想を有つて、動いてゆこうとする女が一人でもあるでせうか」と批判する。

この脱退事件が影響してか、翌月（一九一七年一月）は休刊になる。「編輯だより」には「一月号は編輯を主に遣つて居りますものが病気のために」と記された。そして、休刊後の二巻一号（二月）は、突然薄い雑誌となって姿をあらわす。薄くなったのは、「高踏的なもの」「単に同人の機関」にしようとした結果であり、原稿は選んでいるからむしろ以前より内容的には充実していると説明された。ところで、驚かされるのは、新たに翌月三月からビアトリス社では『ビアトリス』以外に、『女性』という雑誌を発刊することにしたと原稿を募集している事実である。もちろん実現されなかったが、この『女性』は、ビアトリス文芸研究会の機関誌として考えていたようである。また「懸賞募集」とあることから投書雑誌のようでもあった。ちなみに選者は、森田草平（小説）、秋田雨雀（脚本）（小品）、生田長江（評論及感想）、山田邦子（短歌）。賞金まで明記してあり、女性会会員には「作品の批評添削に応ず」と記す。『ビアトリス』と『女性』と、二冊もの、そのうえ賞金まで出す雑誌を刊行する余裕が、人力面、経済面においてあるとは考えられず、無謀な試みと思われる。そして、ついに二巻三号（一九一七年四月）をもって終わりとなる。「編輯雑感」は、「それ経営難にぶつかり難儀をしたが、今はもうくぐり抜けた、今月号が出たことを喜び幸福を感じている」と述べる。それにもかかわらず、廃刊したのはなぜか。経済難以外に、私は原因として、花世と夫である春月とたづとの三角関係の破綻を挙げたい。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

春月の自殺後、花世と、春月の弟である博孝が編集した『生田春月全集　第十巻』（新潮社、一九三一年八月）の年譜には、一九一七年「五月、前年秋頃よりはじまりし山岡田鶴子（仮名）との恋愛のため家庭不和。十五日、夫人離婚の決心をもちて帰国せしが、七日にして帰京す。後恋愛を放擲し、専ら詩作に耽り、又広く読書に耽る」と明記されている。すなわち、花世は五月一五日、離婚の決意で、『ビアトリス』をも捨てて、徳島に帰ったのである。たづ自身は、春月を本気で愛していたわけではなく、その思いを受け入れる気持ちはなかった。しかし、春月の露骨なたづへの心の傾きを目にして、花世は堪えられず離婚を決意するのである。春月は、花世の突然の家出に、あらためてその存在の重要性に気づき、たづへの思いを断ち、花世とともにやり直すことを決心する。結果、花世とたづも離れることになったのである(4)。

一九一七（大正六）年一〇月「新しい女歴訪記・隠遁生活の山田たづさん」（『女の世界』三巻一〇号）において、たづは訪問記者に『ビアトリス』の廃刊理由は「収支の償はない為めですか？」と尋ねられ、「否え、損といふほど損はなかつたのです」「手伝つてくれる人があれば、また、出さうと思つてゐます」と答えている。花世なしで、雑誌を発行するだけの力に欠けるたづは、廃刊するしかなかったのだろう。

以上、『ビアトリス』の創刊から廃刊までの経緯を見て来た。次に、その作品についてはどうであったか、簡単に触れておく。『ビアトリス』には、小説、評論、翻訳、短歌、感想、随筆、など種々のジャンルの作品が掲載された。まず注目される作品に、草野ゆり「祈らんとして」（一巻二号、一九一六年八月）がある。これは、遊女の心中事件に触発された感情を描き、近代公娼制の悲惨さを告発した手記である。著者の草野ゆりに関しては、『ビアトリス』に社員として参加しているが、掲載作品はこれのみなので、どのような背景をもつ人物か明らかではない。しかし、「手記の中より」とサブタイトルがついてあり、「私の育つた廓内には十軒許りの貸座敷があつて」と説明してあるので、遊廓内で生計をたて、幼子を抱えながら暮らしていることがわかる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『ビアトリス』誌上に残る唯一の特集に、「大杉神近伊藤三氏の自由恋愛事件を論ず」（一巻六号、一九一六年一二月）がある。これは、神近市が大杉栄を刺すという一一月九日に発生した「葉山の日蔭茶屋事件」を取り扱ったものである。『青鞜』が無期休刊になってから、伊藤野枝と大杉栄、そして神近市と堀保をも巻き込んだ四角関係が話題になっていただけに、『ビアトリス』同人たちの関心も高かった。ところで、その『青鞜』の女たちの目の前から姿を消した野枝であるが、実は八月に生田花世のもとを訪れていたことが、「女流作家の動静」（一巻三号、一九一六年九月）に記されている。

野枝さんはどうしてゐるのだらうとは何人も思ふ事でした。私も随分波瀾を起した後の氏は大阪か大原か東京かと思つてゐますと、本月（八月――筆者注）の初めの或る夕暮れ、（中略）私の家の小さな門にお入りになりました。（中略）大杉栄氏が御一緒でした。（中略）野枝氏は非常に明るいいそいそとした声で話して、不思議な程柔かな女性味を帯びた笑顔を絶えずお見せでした。『平塚さんにお逢ひになりましたか』から野枝さんは訊ねたり、『ビアトリス』をばらばらと見たりしてお二人は十五分位して帰りました。

らいてうの『元始　下』によれば、野枝が大杉栄と茅ヶ崎のらいてうを訪ねたのは、「葉山の日蔭茶屋事件」直前の一一月六日である。らいてうの眼に描き出された野枝は「お茶屋の女中」「やつれが見え」「すさんだ感じ」と悲惨である。それに比べれば、花世の前にいる野枝は、愛の至福につつまれて、艶やかな姿をみせている。時期の違いも関係していようが、はしなくも、らいてうと花世の、野枝に向き合う視点の違いをあらわにしているようでもある。

さて、「葉山の日蔭茶屋事件」は、「社会主義者の大杉栄が新しい女神近市子に斬れた」（『都新聞』一一月一〇日）、「事の起りの源と噂されて居る伊藤野枝さんも加害者の市子さんも嘗ては共に雑誌青鞜に手を携へて新しい女としての活躍を試みて居た丈け社会の注目を惹く事も強く」（『読売新聞』一一月一四日）と報道されているように、社会主義者と「新しい女」たちの事件として取り上げられた。その「新しい女」の流れを引く、『ビアトリス』が特集を組むのも当然の経緯であろう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

執筆者は、山田わか「恋愛の意義」、山田たづ「不自然なる自由恋愛の破綻」、岡田幸子「舵を誤まりし恋愛」、山田邦子「私見」、久保田富江「難しいお答」、坂本真琴（野母）「お三人の為めに」、生田花世「不自然な恋愛の災禍」、の七人である。

事件の最初の新聞報道が一一月一〇日で、翌月一日発行の雑誌に特集されたのであるから、非常に早い動きである。たとえば岡田幸子の「舵を誤まりし恋愛」には〈一一月一三日記〉とあり、それゆえ事実関係においては、どれも概して新聞報道を出ることがなく、受け売り的な批判もみられる。しかし、彼女たちは、新聞報道以前から神近市に同情し、その一方で伊藤野枝、大杉栄に反発する、という感情を共有していた。とりわけ、大杉栄が唱えた自由恋愛には「あんな不自由恋愛は又とはありません」（山田わか）、「獣的恋愛」（岡田幸子）、「それぞれの人格を無視し、其の霊魂を蹂躙しすぎる事」「あまりに女性を物質視しその生活を軽蔑する事」（生田花世）、と酷薄である。

この特集号の「編輯だより」には、「神近氏大杉氏の自由恋愛事件批判の論文で、今月号は賑やかなので、内部の人々は喜んで居ります。尚今後も問題があり次第、充分に一同の意見を発表するやうにしたい」と記され、単なる文学雑誌にはしたくないという意志をみせる。

『ビアトリス』のなかで見逃せないのが、野枝が編集した『青鞜』第三期に集まった女たちの動きである。第三期『青鞜』は、社員制を解体したこともあって、どのような理由で『青鞜』にかかわったのか、突然の無期休刊後はどうなったのか、不明の人物も多い。しかし、『ビアトリス』を追うことで、もし『青鞜』が続いていたらそのまま『青鞜』で活躍していただろう様子が見えてくる。

たとえば、吉屋信子である。信子は一九一六年一月、『青鞜』最終巻である六巻一号に「断章」（詩）を初掲載する。さらに二号（最終号）には「小さき者」（小説）を載せる。ちょうど、『少女画報』に「花物語」（鈴蘭）が採用され、その連載が始まる記念すべき年でもあるが、『ビアトリス』発起人、社員になったことは知られていない。信子は、『ビアトリス』に三作品を掲載する。手紙文「線路」（一巻一号、一九一六年七月）、小品「赤い帯」（二号、八

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

月）、詩「白き鳩」（六号、一二月）である。このなかで「線路」は、信子の文学に対する迷いと決意が表明されていて、重要である。「線路」は、妹信子を東京に残して就職先の秋田へ行ってしまった兄、忠明への手紙という形をとった作品である。信子は、文学を志した自分のために、これまで兄がしてくれたことを振り返りながら感謝し、語りかける。

兄さま。私は、善い仕事とては何一ついま出来ません。（中略）路さへ踏ちがへなければ、やがて、未来と呼ばれたタイムには、必ず私の持つ善き力の生長と共に立派な仕事をなしとげることを神様がお許し下さいますと、私、信じます、かたく、かたく、かたく信じます。

文学者として認められはじめた自分への不安と自信。そして文学にむかう決意を、吉屋信子は『ビアトリス』に記していた。

小説の分野で活躍したのは、生田花世である。『青鞜』時代は感想にその力量を発揮したが、『ビアトリス』においては、「昔頻りに書いたやうな赤裸々な心象を其の儘一面からばかり見て記すやうな感想が書けなくなりました」「私独りぎめの小説を書いて見てゐます」（「新秋雑語」三号、九月）と、小説に向かう心境をみせる。この『ビアトリス』から、あらためて小説を書き始めるのである。『ビアトリス』には毎号掲載し、その何作かは後に刊行された『燃ゆる頭』（中西書房、一九二九年四月）に収録された。生田花世の小説は、『ビアトリス』のなかでも、圧倒的な存在感をはなっている。文学史の上で、もっとその文学は評価されてもよいのではなかろうか。

そのほか、注目される執筆者に加藤みどり、斎賀琴、岡田幸子、岡本かの子、川路歌子などがいる。

なお、秀靹音（ともね）（秀しげ子）も二度短歌を掲載している。芥川龍之介に「愁人」と恋され、関係ができたあとは「狂人の娘」「僕の生存に不利を生じたことを少なからず後悔してゐる」と芥川の自殺原因の一部にもなったといわれる秀しげ子。彼女は『青鞜』にも靹音の名で、二度短歌を載せている。

最後に『ビアトリス』の活動として、「故女流作家追慕会」を企画、実現したことも記しておきたい。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そもそもの発案者は賛助員の岡田八千代だった。「編輯だより」（一九一六年八月）に、第一回社員小集（七月一二日、出席者は、五明倭文子、山田邦子、生田花世、山田たづ、久保田富江、村岡たま、杉浦翠子、山田わか、世良田優子、小林益子、河井酔茗）の様子が記されてあり、その時「岡田八千代氏から五明倭文子を通してビアトリス社にお話しの故女流作家追慕会といふ事についての皆様の御考を聞いて見ましたが、何れも結構でせうとの御意見でした」と、まとまったのである。なお、「山田わか子氏が研究的会合を催すやうにとの御希望も亦皆んなで同意いたしました。段々実現されてゆく事でせう」ともあり、『ビアトリス』を女性問題を学ぶ場にしたいとの意見も、山田わかを中心にその一部にはあったことが窺える。

「故女流作家追慕会」の意図するところは「明治以来秀れた才分を抱いて惜しくも世を去られた閨秀作家は、樋口一葉女史、大塚楠緒子女史、瀬沼夏葉女史をはじめ、まだ可成りあるやうです。若い私達は、一足先に歩いて行かれた此の人々に対して限りない愛慕を抱かずにはゐられません」（前記「編輯だより」）と、自分たちが歩む文学の道を一足先に歩いた女性作家を、女みずからの手で記憶し、追慕し、いとおしむ点にあった。おそらく日本の女たちにとって、初めての試みだった(5)。男性中心社会のなかで、分断されがちな女たちが、このような形で結集し、一葉は別格としても、不当に忘れられた女性作家を読み直し、記憶していこうという点で先駆的な企画だったといえよう。

『ビアトリス』は、文学史的には『青鞜』の後を受ける形で創刊された。「ビアトリス社清規」の「文芸を愛好及び創作する女性」に顕著であったように、『青鞜』の文学分野を中心に引き継いだ雑誌であると考えることができる。『青鞜』無期休刊後の、発表誌の無くなってしまった状態を解消すべく、『ビアトリス』を創刊し、途切れてしまいそうだった『青鞜』第三期の女たちを蘇えらせた点、また、生田花世の文学と生涯を考える上でも、もう一度読み直し、評価されてしかるべき雑誌である。一九一〇年代前後に文学を志した女たちにとって、『女子文壇』（一九〇五年一月～一九一三年八月）、『青鞜』（一九一一年九月～一九一六年二月）、『番紅花』（一九一四年三月～八月）、『ビアトリス』（一九

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一六年七月〜一九一七年四月）は、それぞれ微妙に異なった栄養素を含むものではあったが、多くの種が集まり芽を出し成長していった、大切な大地だったのである。

注

（1）山田たづは、一九一三年五月に杉浦翠子の発起で開かれた「女子文壇誌友小集花の会」に、松井（吉田）静代のすすめで上京し参加した。静代の自伝『ひとつの流れ』（光風社書店、一九七七年）一三四〜一三五頁には、この会で知り合った花世が、たづを連れて帰り、そのまま花世のところに同居することになった、と記されてある。なお、一九一三年七月の『女子文壇　第三増刊・新らしき文芸』には、たづの小説「執着」が掲載された。

（2）素木しづと『青鞜』に関しては、山田昭夫「素木しづ白描」（『素木しづ作品集』北書房、一九七〇年）を参照。森田たまと『青鞜』に関しては、永井紀代子「誕生・少女たちの解放区——『少女世界』と「少女読書会」」（『女と男の時空——日本女性史再考』奥田暁子編、藤原書店、一九九五年）を参照。

（3）管見では、五月三、四、五日の『万朝報』が「新婦人問題」（一）〜（三）においてこの問題を取り上げた。そこには「所謂新しい女の唯一の奮闘家を以つて目されてゐた伊藤野枝子と社会主義研究者大杉栄との間に恋愛関係が突発したといふことが伝へられて、間もなく野枝子が良人辻潤と別居したといふことが又伝へられた」と記されてあり、事実の発覚がこの記事以前であろうことがわかる。

（4）この三角関係の破綻に関しては、花世の小説「愛の危機」（『新公論』一九一八年九月）、春月「愛妻に送る公開状」（『婦人世界』一九二二年九月）、たづ「昔の親友の生田花世さんへ」（『婦人世界』一九二二年一二月）、花世「女性苦に耐へゆく心」（『婦人世界』一九二三年三月）に詳しい。

（5）この追慕会は『現代婦人運動史年表』（三井礼子編、三一書房、一九七四年）、『日本婦人問題資料集成・第十巻・近代日本婦人問題年表』（ドメス出版、一九八〇年）にも記されている。

付記　本稿は、「『青鞜』と『ビアトリス』——付『ビアトリス』総目次」（『鶴見日本文学』二号、一九九八年三月）をもとに新たに書きなおしたものである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Ⅱ　総目次

『ビアトリス』総目次・凡例

一、仮名遣いは原文のままとし、旧漢字、異体字はそれぞれ新漢字、正字に改めた。
また、明らかな誤植、脱字以外は原文のままとし、人名その他もあえて統一をはからなかった。

一、標題は原則として本文に従った。副題は——（ダッシュ）の後に示した。

一、＊印は編集部の補足であることを示す。

一、原則としてルビは付さなかった。

一、総目次はできるだけ詳細に記載するよう努めたが、目次、奥付、広告等には触れなかった。

（編集部）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第二巻第一号　一九一七（大正六）年二月一日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

執筆者索引

あ

か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『ビアトリス』執筆者索引・凡例

一、本索引は配列を五十音順とし、外国人は苗字（姓）を基準とした。

一、旧漢字、異体字はそれぞれ新漢字、正字にあらためた。

一、〔 〕内は編集部が補足したものである。

一、表記は、巻数―号数―頁数の順とした。

一、第一巻第一号別欄の頁数には、「＊」を付した。

（編集部）

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Ⅲ 索引

小社では、『ビアトリス』復刻にさきだち、あらかじめ執筆者及び著作権継承者の方々に、復刻のご了解を得たうえで製作・販売にあたっております。しかし、次の執筆者及び著作権継承者の方々については、著作権台帳その他できるかぎりの手段をつくして、ご連絡先を捜し尋ねたのですが、現在のところわかっておりません。お心あたりのある方は、小社編集部までお知らせ下されば幸いです。

——不二出版編集部

会津鳴矢子
秋野多香子
浅野英子
飯島富久子
石井俊子
石井洋子
泉ゆり子
市瀬君子
市花小ゆき
今井稠子
岩淵百合
江森笙子
岡田幸子
小川峰子
川路歌子
草野ゆり
久保田富江
小泉くに子
幸島徳子
後藤桜子
小林かね
小林益子
五明倭文子
桜井八重子
秀　鞆音
新免さかえ
首藤郁子
杉浦翠子
杉浦非水
杉淵　梅
鈴木綾子
須永みわ
関口春子
月波みつる
土井かちみ
戸津たりゑ
野中敏子
橋田あさ子
長谷川梅子
長谷川末女子
平間蒼生
平間民子
星長晴子
本郷京子
町井久子
三島紅子
緑野麗子
宮川ゆみ子
守屋光子
矢木小百合
山川初子
山田たづ
横山千代子
吉田春子

（二〇〇三年五月現在）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

復刻版 ビアトリス

2003年6月30日発行

定価（本体18,000円＋税）

発行者　船橋　治

発行所　不二出版

東京都文京区向丘1-2-12

☎03（3812）4433

印刷所　三進社

製本所　青木製本

中性紙使用

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

ISBN4-8350-1522-3

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

GEISEL LIBRARY
UNIVERSITY OF CALIFORNIA, SAN DIEGO
LA JOLLA, CALIFORNIA

UNIVERSITY OF CALIFORNIA, SAN DIEGO
3 1822 02940 8721

East Asia IP... 745 10/7/03

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

UNIVERSITY OF CALIFORNIA, SAN DIEGO
3 1822 02940 8721

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA